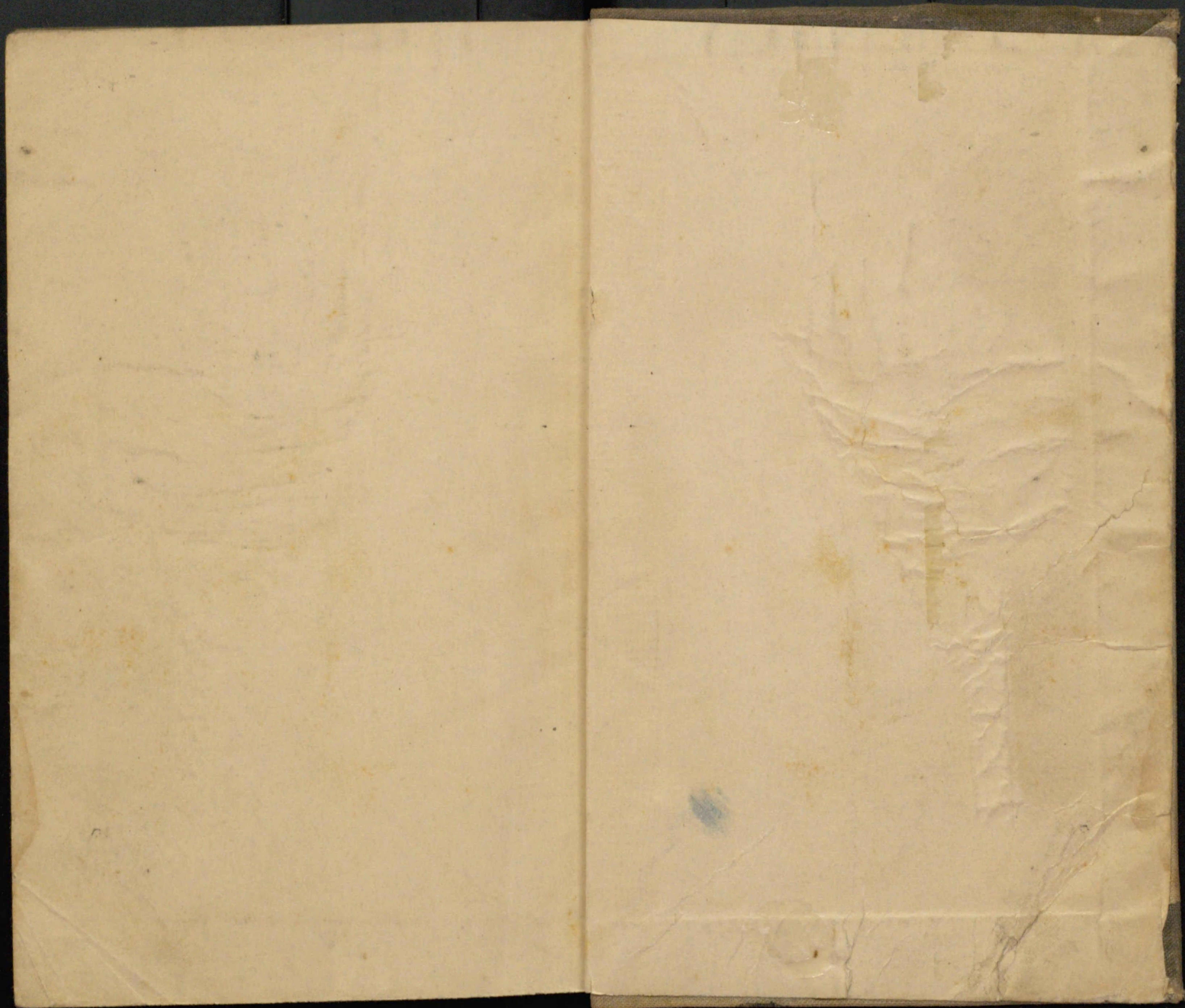


522-125-1



\*1200700430271\*









幻  
の  
塔

長田幹彦著

522  
125イ



I種  
W



\*1200700430271\*

……何處かで、かすかに、いとかすかに鐘の音が鳴り響いてゐる。それは舊教の寺院で降誕祭の前夜に撞き鳴らすあの朗らかな鐘の音であつた。一點、二點、三點、あとは天使が諸聲をあげて、神の國の淨樂を唱和する旋律のやうに、さまざまな音色が餘韻をひきながら纏れて、はるけき郷國を瞻望する人々の胸に限りない慰樂を吹込みながら、暗い天空を掠め、雲路の涯遠く颯々と消えてゆく。

と、みると、夜の空には、幻の棧のやうな巨大な圓屋蓋と尖塔の影が浮べることくに朦朧と揺曳してゐる。その窓々には、五彩を鏤めたやうな美しいステインド・グラスが堂の内部の燭光の残映を受けて、燦爛と輝いてゐる。夜は暗く、圓屋蓋の片蔭には魔のやうな黑影が絡つてはゐるが、併しそれを取圍む空は紺青に隈どられて、青や、紅や、黄や、紫の星の群が圓屋蓋のなかゝら湧き起る聖樂の音に答へて、歌ひつ、舞ひつ、時空を絶した永遠の曲を亂舞

してゐるやうにみえた。

一人の天使はやがてその紫の星のひとつからついと生れ出て来た。さながら鵝毛でつくられたやうな軽い翼をひらひらとはばたきながら圓屋蓋のまはりを舞つて歩いてゐたがそれと一緒に鐘の音は又ひとしほ高らかに鳴り響いて、音波はひとつひとつ美しい虹の環をつくりながら波紋のやうに下界へ落ちてくる。

天使は空を舞ひながら黄金色をしたその半弓をあげた。と、一筋の白羽の征矢は眞一文字に虹の波紋を貫いて、隼のやうに此方へ飛んでくる。照子はその一筋の矢が自分の心臓へぐさと刺つたと覺えて、ふつと空想から眼覺めた。狂ほしいまでの瞳を据ゑて、その幻を空にみつめてゐる照子の胸には、それと同時に、限りもない幸福の感じが炬火のやうに燃え上つてくるのであつた。

照子は今年の春、舊教に屬する麻布の聖心女學院を卒業して、今やつと十九のうら若い胸に人生の夢が眼覺めかけて來たのである。玄い時から富み榮えた福井の家に生れて、宗教に依つ

て極めて品よく育てられて來た彼女は、物心づく頃から常に、淨い理想に憧れ空想を友として毎日毎日唯樂しい幸福な日ばかり送つて來たのであつた。彼女は自分の居間にゐて、硝子窓を透してみえる夜の空を振仰ぐ時、いつもさうした美しい幻影が音楽のやうな惑はしをもつて心に迫つてくるのであつた。もうそれは幾年も前から常に眺めてゐる幻影で、その天使の顔が年と共に變つていくばかりであつた。或時は聖畫の中から、又或時は現實の人々のなかゝら、その面影がいつともなく生れて來て、彼女の心に深い印銘を残してゆくのであつた。その晩も彼女はその天使の顔に或青年の面影を移してみてゐるのであつた。

照子はもう一度空中に幻影をみやうとして眼を据ゑたが、もうその時にはあえかな影もいつしか空しく消えて、唯寂しい星の瞬きばかりが、暗い暗い空一面にひろがつてゐた。照子は思はずほつと嘆息を吐いて、それなり自分の机のうへへ眼を落した。そこには美しい置電燈の影に、讀みさした「即興詩人」が置いてあつた。

その時、室外の廊下の方で、ふつと人の足音が聞えた。聞耳をたてると、それは母家の方か

らつゝまじやかな足調で歩いてくる音で、やゝ少時すると彼女の居間の前のところではたと止る。それと同時に紙襖の外では、彼女付きの小間使のお春の聲がして、

「お嬢様、御免遊ばせ。」と、云つたかと思ふと、その紙襖は滑るやうに開いて、そこからお春が淑やかに廊下へ膝を落した姿をみせて、

「あの、お嬢様、唯今彼方へ柴山様の若様がお越しになりましたして御座いますから、あの、奥様がお嬢様にもどうぞおいで遊ばすやうにつて、さう仰有つて被居いますんで御座いますが……。」と、いふ。

それを聞くと、照子は急に嬉しさに、いそいそしだして、

「あら、まあ、光雄様が被來つたの？ さう、それぢや私すぐ行きますわ。」と、云つて、身輕に立ち上りながら、「あの今夜は何方へお通ししてあるの？」

「あの、お二階の方の應接室にお通しして御座いますの。どうか、お早くおいで遊ばしますやうに。」

「え、私、すぐにいきますわ。」さう云つて、照子はそのまゝ居間の隅にある大きな姿見へいつて、一寸頭髪を直したり、衣紋をつくらつたりしたあとで、やがて小禽のやうに生々とした様子で、廊下の方へ出ていつた。お春は紙襖をしめて、そのあとから隨いて來た。

廊下へ出てみると、廣々とした庭園にももう冬が來て、こんもりした樹立も刺々しくうら枯れてゐる。郊外の夜はまだ宵ながら氣味の悪いほどしんと更けて、向ふの土手を通つてゐる省線の電車のスパークが漆のやうな暗い星空へ蒼ざめた顫きを與へてゐる。風もないのに、寒氣は肌を刺すやうに迫つて來た。

一旦母家へいつて、そこから又廊下づたひに洋館の方へ來てみると、角々に點けた電燈が眼の覺めるやうに明るかつた。敷物を敷つめた階段は足を吸込むやうな音をたて、照子は一段毎に何かしら氣が輕くなつてゆくやうな心持がするのであつた。

二階の應接の前へ來ると、照子は態と息をつめて内の様子を窺つたあとで、突如その扉を開けた。夫と一緒に抑へても抑へきれない笑ひが彼女の唇にのぼつて、その大きな腕椅子



に坐つてゐる人の姿をみると彼女は透きとほるやうな笑聲と一緒に、

「あら、光雄様、被來いまし。」と、いふ。

その時、腕椅子からついと立上つたのは、まだ年の程廿二三の小肥りのした色の白い青年で襟にJの字の襟章のついた大學の制服を着てゐる。頭髮は五分刈にして、無雑作な様子にしてゐるが、併し見るから感じのいゝすつきりとした、貴族的な青年であつた。彼は照子の母であるみな子未亡人と卓を距てゝ對座して、今迄何か世間話してでもしてゐたらしい寛ぎをもつてゐた。

「光雄様、貴方、今被來いしましたの。さうぢやないんで御座いませう。又今迄母様とお話をし

て被居つて、今になつて私のところへさう云つてお寄越しになつたんで御座いませう。ほんとに随分ですことねえ。」と、態と拗ねたやうな媚態を現はしながらいふ。

光雄は満面に笑ひを含んで、

「いや、さうぢやないですよ。僕はつい今しがた來たばかりなんです。」と、いふ。彼は陸軍の

元帥である柴山伯爵の次男で、帝國大學の法科の學生であつた。家柄がいゝので、口振りなぞも何處かおつとりしてゐて、制服につけた雪白のカラーが極めて清楚な感じを與へた。

照子はそのまゝ彼の傍のソツファへいつて腰をかけたながら、

「ほんとに今被來いしましたの。それならよう御座いますけど。ほゝゝゝ。」と云つて、可愛らしく小首を傾げながら、「ねえ、光雄様、又今夜は何か新しい樂譜をもつて來て下すつたんで御座いませうねえ。此間のお約束ですわ。」といふ。

光雄は合點いて、

「え、今日はホルレンデルの「花の精」をもつて來ましたよ。昨夜銀座へ散歩にいつて、一寸十字屋へ寄りましたら、思ひがけなくあつたもんですから早速取つて來ました。」と、云つて、傍の卓子のうへゝ置いてある紫縮緬の包みをとつてそのなかゝら薄青色紙でとちた大判の樂譜をだす。

照子はさも嬉れしさうに眼を輝かして、

「あら、「花の精」が御座いました？ まあ、ほんとに嬉れしいこと。」と、云つて、その楽譜を受け取つて開いてみながら、

「もう弾いて御覽遊ばして？」といふ。

光雄はその顔を笑ひながら見て、

「いゝえ、まだ僕は弾いてみないんです。初めのページを開けてみたどけで、もう手が出なくなつてしまつたんですよ。ホルレンデルは難かしいですからなあ。はゝゝゝ。」

「でも「花の精」ぐらゐなら割りに弾き易いつていふぢや御座いませんか。他の大物になると大變ですけれど。」と、云つて、照子は開けたページの譜を顎で拍子をとりながら讀んでみて、

「ほんとによろ御座いますねえ。序曲からして違ひますね。私早く弾いてみたい！」と、子供のやうに足を慄はしながらいふ。

光雄はその心持ちに引込まれてゆくやうに、

「いや、僕はこれを貴女に弾いて聞かせて頂くのを楽しみにやつて來たんですよ。貴女ならそ

のまゝでも弾けるんですから。」

照子は大業な表情をして、

「あらまあ、そんなにお煽てになつても駄目ですわ。私にだつてこれは練習しなけりや一寸荷が勝ちすぎて居りますもの。」と、云つて、又愛くるしく微笑みながら、「でも光雄様、一寸弾いてみませうか。」と、いふ。

光雄は胸を開いて、

「さあ、さあ。どうぞ聞かして下さい。」と、云つたが、その言葉で照子が立たうとするのを、今迄黙つてみてゐた母未亡人はつと手で抑へて、

「照子、まあ、貴女それよりもあの畫を御覽なさいよ。今光雄さんが態々持つて來て下さつたんですよ。」と、云つて、火爐のうへの棚へたてかけてある大きな油畫を指さす。それは照子の父にあたる亡き福井工學博士の肖像畫であつた。照子はうつかりしてゐて、さう云はれるまでその畫に少しも氣がつかかなかつたのであつた。

その肖像畫は世間（よ）にありふれたものとは一寸描法（びやくぽう）が變つてゐて、作業服（さぎふく）を着た福井博士（ふくい）の半身像（しんざう）であつた。背景（はいけい）には遠見（とほみ）に彼の經營（けい營）してゐた大造船工場（たいぞうせんこうぢやう）がうすく影（かげ）のやうに描いてあつてその前に博士（はかせ）の少し上向き（うへむき）になつた顔（かほ）が浮き出すやうに描いてあつた。半白（はんぱく）の頭（あたま）をきちんと分けた、少し長手（ながて）の顔（かほ）にはきかぬ氣（き）の表情（へうじやう）が生けるが如く（ごと）に現（あら）はれて、多年（たねん）造船界（ぞうせんかい）に雄飛（ゆうひ）してゐた一種（しゆ）の偉人（ゐじん）の面影（おもかげ）が髣髴（ほうふつ）として畫面（がめん）に浮動（ふどう）してゐた。

照子（てるこ）はそれを見ると吃驚（びっくり）したやうに、

「まあ、お父様（とうさま）！」と、云つたつきりしばらくの間（あひだ）じつとその畫面（がめん）に見惚（みご）れてゐたが、やがて

「光雄（みつお）様、これは誰（だれ）方（か）がお描（か）き遊（あそ）ばしたんですの？ こゝには松谷（まつたに）としてありますけれど、……」

と、云つて、光雄（みつお）の方（ほう）をみる。

光雄（みつお）も畫（え）の方（ほう）をみて、

「照子（てるこ）さんは御存知（ごぞんち）ないでせう。それは松谷隆（まつたにのり）といつて、白光會（はくわくかい）でも新進（しんしん）の青年畫家（せいねんが）なんですよ。僕の友人（ゆうじん）の弘田（ひろた）が保護者（ぼごそ）のやうになつてゐるもんですから、その關係（くわんけい）でつい此間（このま）から僕（ぼく）のところへも遊び（あそ）びに来（こ）るやうになつたんですが、實（じつ）に藝術家（げいじゆつか）らしい、男（をとこ）です。まだ年（とし）は僕（ぼく）等（ら）と同じ位（くらゐ）なんです、弘田（ひろた）の話（はなし）によると非常（ひじやう）な有望（いうぼう）な未來（みらい）をもつてゐる男（をとこ）ださうで、批評家（ひひやうか）なんかにも大變（たいへん）に囑目（しよくもく）されてゐるんださうです。」と、云つて、未亡人（みわうじん）の方（ほう）をみながら、「唯併（たゞしか）し非常（ひじやう）な貧乏（びんぱん）人（にん）なんで、僕（ぼく）達の仲間（なかま）でどうかして生活（せいかつ）の道（みち）をたて、やり度（ど）いと思（おも）つて、方々（はう々）へ肖像（せうざう）を描（か）かして頂（いた）くことを願（ねが）ひして歩いてゐるんです。幸（さい）ひお母（かあ）さんのお話（はなし）に今度（こんど）のお父（ちち）様の三年忌（さんねんき）に是非（ぜひ）油畫（あぶらゑ）の肖像（せうざう）が欲しいといふことだつたもんですから、まあ試（こ）みのつもりでやらしてみたんです。ところが案外（あんぐわい）な出來（でき）なんです、僕（ぼく）も大變（たいへん）喜んでゐるんです。これはお父（ちち）様（さま）のお寫真（しやしん）をモデル（もでる）にして自分（自分）で考案（かうあん）して描（か）いたんですが、それにしちや、實（じつ）によく出來（でき）てゐるぢやありませんか。」

照子（てるこ）はまだ肖像畫（せうざうが）から眼（め）を離（はな）さずに、

「ほんとにねえ、何んてよく出来てゐるんで御座いませう。ほんとにお父様に生寫しで御座いますわ。」

未亡人もうつとり畫面をみて、

「ほんとにお上手ですことねえ。あの寫眞だけで、これ位にお描き下さるんですもの、大した御技量ですよ。」と、云つて、亡き人の面影から消え難い追憶の數々を想起してくるやうに傷ましい眼つきになる。

光雄は態と快濶に、

「それでも、何處かいけないところがあつたら、皆さんの御意見を伺つて充分直すといつてゐましたから、もし御不満な點があつたら、御遠慮なくさう仰有つて下さい。今日もこの畫をもつて来て、そのまゝ、僕と一緒に此方へ伺はうかなんていつてゐましたが、何んだか極りが悪いからといつて、態々途中まできて歸つていつてしまつたんですよ。はゝゝゝ、實に初心な面白い男ですよ。」

照子は何を云はれても黙つて、畫面ばかりみてゐた。彼女の傷み易い心にはあまりによく似た亡き父親の姿から、耐へがたい思慕の情が胸一杯に込みあげて来て、彼女はいつかしら美しい双眼に溢れるほど涙を流してゐるのであつた。

福井工學博士が世を去つてからもう今年で三年になるのである。彼は青年時代には小さな鐵工場の職工までして刻苦して業を修めた立志傳中の人であつた。見る影もない苦學生として大學を卒業すると、先輩の引立てで英國へ七年ほど留學して、それからがやつと好運の芽がふきだしたのであつた。大學教授から、海軍の造船監になり、それから引續いて神戸にある日本造船株式會社の社長になつて、遂にこの巨萬の富を積んだのであつた。そして五十八を一期に肺炎で空しく世を去つてしまつたのであつた。この光雄の父の柴山伯爵なども、海軍關係で別懇にしてゐたものであつた。

一座が妙に濕り勝ちになつてしまつたので、光雄はそれを引立てるつもりで、

「さあ、照子さん、お父様の御肖像は明日日のあるうちによく御覽になつて、いけないところ

があつたら、さう云つて下さい。それよりもその「花の精」を早く聞かして下さいな。」と、笑ひながらいふ。

照子は涙にぬれた顔を此方へ向けて、

「光雄様、私なんだか、急にお父様のことを思ひ出して、悲しくなつてしまひましたわ。もうピアノを弾くのはよしませう。」と云つてそのまゝ又腕椅子へぐつたりと腰をかけてしまふ。光雄は笑つて、

「はゝゝゝ。照子さん、貴女はほんとに感情が強いんですねえ。お父様の御肖像をみた位でそんなに泣いたりなんかしちや駄目ですよ。」

照子は卓子へ片肘ついて顔を伏せながら、

「でも光雄様、私、……」と、云つたつきり涙聲になつて、

「私、この頃何んですか、お父様の夢ばかりみるんで御座いますもの。眠つてゐるときでも、あゝもしお父様が生きてゐて下さつたらと思ふと自分では知らずに泣いてゐることがあるんで

御座いますの。」

「はゝゝゝ。さうどうも、感傷的になつてしまつちや可けませんね。まあ、そんなことを云はずに、氣晴らしにピアノを弾いて下さい。さうすりや僕も久振りで「花の精」が聞けるんだし……」と、光雄は機嫌をとるやうに云つたが、それでも照子が顔をあげようとしないので、やがて氣を變へたやうに「照子さん、それはさうとお兄様から何かお便りがありましたか。さう、さう僕は忘れてゐた。昨日巴里から手紙を下すつたんですが、相變らず御盛んのやうですねえ。その手紙のあとに何んですか今彼地で有名なバレエへ出てゐるとかいふ女優の自署がしてありましたよ。その手紙の様子でみると、兄さんは相變らずお酒は止まんやうですねえ。お母さまのところへは何かお手紙が来やしませんか。」と、今度は未亡人の方へいふ。

未亡人はそれを云ひ出されると冷たい顔になつて、頭を振りながら、

「いゝえ、私のところへはもうこの二月ばかり何のたよりもありませんの。何かたよりがありやきつとお金の催促なんですもの、私もほんとに愛想が盡きてしまひましたよ。何うしてあゝな

んでせうねえ。いつも此方から手紙をやる度に、歸れ歸れと申してやるんですけど、その返事さへ呉れたことがないんですもの。」

「いや、あの様子ぢやとても當分の間は日本へは歸られないでせうよ。實に面白さうですからなあ。はゝゝゝ。」

「でもそれにしても、もうあれも貴方と同じ年なんですから、少しは眼が覺めさうなもんだと思ひますよ。ほんとにいつまであゝなんでせうねえ。」と、云つて、未亡人は打沈んでしまふのであつた。

照子の兄の貞一は今佛蘭西へ留學してゐるのであつた。それも表面は留學といふことになつてゐたが、彼は父博士のあの謹嚴な性格には似もやらず、もう中學にゐる時代から悪友に誘はれて、酒と女の巷へ足を踏み入れるやうな身持であつたので、父博士は世間への聞えを憚つて外國へ出してやつてしまつたのであつた。博士が英國にゐた時代の一種の黨化から思ひついで、せめて海外萬里の異域へ追ひ遣つて置いたら、きつと性根がついて、學事に専念するやう

になるであらうと、博士はそればかり樂しみにしてゐたのであつた。

貞一はそれでも博士の在世中は英國の劍橋大學に籍を置いて日本への聞えだけでも神妙にしてゐたが、父博士が他界すると又そろそろ昔の身持ちに歸つて、いつの間にか佛蘭西へ流れ渡つて、そこで遊惰な、放埒な日を送つてゐるのであつた。彼地から歸つて來る人達はいづれも眉を擡めて彼のことを談るのであつた。で、今ではこの幸福な家庭の中で彼一人が不思議に暗い影を一家のうへに投げてゐるのであつた。

未亡人は冷たくなつた茶を啜りながら、

「それに光雄さん、この節では此方から送るお金も月々千圓ぢかくになつて居りますんですよ。それを送りませんと、やれ、自殺をするの、露西亞へいつて革命黨へ入るのなんて強迫がましいことを申して參りませんで、皆もうほとほと困つてゐますんです。親類のものなんかいつそもう送金を絶つてしまつたらどうかなんて申しますんですけれど、それでは又あんまり可哀さうですし、……何を申しても早く此地へ歸つて來て呉れさへすればよろしいんですけれ

どねえ。」

光雄もしんみりした顔になつて、

「さうですとも、此地へ歸つて被來りや又何うでもなるんですがなあ。」と、云つて、彼はそれとなく照子の方ばかりみてゐた。

照子は暗い顔をして、何を考へるのか、膝のうへで袂を弄んでゐた。彼女の身のまはりに先刻の快潤な處女らしい風はなくなつてその眼は悲しげに打沈んでゐた。

未亡人は愚痴っぽい調子で、

「それにもう父の三年忌もうぢきに來るんですから、せめてあれでも歸つてゐて呉れますと私も大變に心強いんですけれど、とても今のやうな鹽梅ぢや歸る氣なんかありません。ほんとうに私達たつた二人きりで、かうして寂しく暮してゐるのを、少しは察して呉れてもいゝと思ひますよ。」と、云つて、じいつと光雄の姿をみながら、「私いつも貴方にお眼にかゝる度にほんとうにお羨ましいと思ひますよ。あれも正當な學校をふんでゐますと、今頃は貴方と

同じやうにもう大學へも入れて居りませうし、さういふ風にきちん制服を着て毎日大學へ通ふ姿をみたら、私共もどんなにか嬉しいだらうと思ひましてねえ。」

さう云はれると、光雄はいくらかてれたやうな顔をして、

「いや、併し貞一さんももう随分長い間のことですから、そのうちには日本が戀しくなるにきまつて居ますよ。若いうちのことですもの、いくら彼地が面白くたつて、必ず一度は懷郷病にかゝるさうですからなあ。僕の友達で、御存知かも知れませんがあの齋藤子爵ですなあ。あの人はなんかもまだ一年位にしきやならないのにもう日本へ歸り度がつて大變なんです、手紙を呉れる度に泣き言ばかり云つて寄越すんですよ。はゝゝゝ。」

さう云ひかけてゐるところへ、室の外で扉をコツコツとノックする音が聞える。未亡人が入つていゝと合圖をみると、その扉はすつと開いて、脊丈の高い、色の眞黒な青年がやつぱり光雄と同じやうに大學の制服を着て、まるで軍人のやうな體のこなしをしながら、室のなかへ一歩入つて來た。その襟章で見ると、彼は工科の學生であつた。

その青年は謹嚴な態度でにつこり笑ひながら未亡人の方へ、

「小母様、唯今歸りました。」と挨拶して、照子にも丁寧ていねいに會釋えいしやくをしながら、今度は光雄の方を向いて、

「被來いらつしやいました。」と、禮れいをする。

未亡人は軽くそれを受けて、

「啓二郎さん、あんた今日は大變たいへんに歸りが遅おそいぢやないの。又圖書館またとしよくわんですか。」と、いふと、その青年は頭あたまを下さげて、

「は、今日は造船科ぞうせんくわのものだけで、水交社すゐかうしやへ見學けんがくに參りましたので、つひ遅おそくなりましたして……。」と、云つて、そのまゝ、「失禮しつれいいたします。」と、云つたかと思ふと、すぐに又室またしつを出でていつてしまふ。

未亡人は笑つて、

「ほんとに啓二郎は變人へんじんなのねえ。まるで軍人きんじんみたやうで私可笑わたしおかしくつて耐たらないんですよ。」

と、いふ。

啓二郎といふのは、未亡人の遠縁とほえんに當る家の次男じにんで、その郷里きやうりの方の家が非常に貧しい爲めに、小學校せうがくを卒業そつぎふするとすぐから福井家ふくいけへ引取ひきとられて、未亡人の情なさけで學問がくもんをさせて貰もらつてゐるのであつた。邸やしきでは遠縁とほえんのものとは云ひ條でう、食客しょくかくのやうな待遇たいぐうを受けてゐるのであつた。

光雄も笑つて、

「併しかしあの方は非常ひじやうに學科がくくわの方の成績せいせきがいゝさうぢやありませんか。あれなら立派りつぱに小父せぢさんの後繼あとつぎが出來ますよ。はゝゝゝゝ。」

未亡人はいくらか安易あんいな心持こころもちになつたやうに、

「でもいくら學校がくかうの方がよく出來ても、あれぢやあんまりですよ。そりや愛想あいさうツ氣けもなけりや融通ゆうつうもきかないんですよからねえ。人は眞面目まじめめで、惡氣わるまがなくていゝつて云ひますけれど、私わたし、あんな風ふうで世間せけんへ出でていつたら、どうなるかと思おもひますの。もう少しどうにかしてゐるとよろしいんですよ。」



「いや、學生のうちには却つてその方がいゝですよ。それに我々と違つて、あの方は造船科ですから、さう世間を知る必要もありませんし、つまり製圖室へ籠城して、浮世のことがどうなつてゐようと、まるで懸け離れた生活をしてゐりやいゝんですからな。はゝゝゝ。」

二人がそんな話をしてゐるうちに、照子はいつの間にか、そつと椅子から立つて、室の隅に置いてある見事なピアノの前へいつて、そのシートへ就いてゐた。彼女は手に持つてゐた、「花の精」の樂譜をそのまゝピアノの傍の樂譜臺のうへに置いて、ピアノの蓋をあけると、指のすさびに任せて、しめやかな小曲を弾き出した。それは彼女が一番好きな聖樂のひとつで、讚美歌のやうなゆるやかな、悲しげな顫音から成立つてゐる曲であつた。

照子はもう九歳の時から音樂學校の、ローウエル教授に就いてピアノを習つてゐるので技術は年の割にすばらしかつた。彼女の指先によつて打ち出される顫音は悲しげに綿々と咽んで、聞く人の心もいつかしら暗い夜空に隣り星の嘆の方へ引入られてゆくのであつた。その曲が終る頃には、照子の双眼には又涙が一杯に光つてゐた。

### 三

その日は、聖心女學院で、クリスマス催しの下相談があつたので、照子も午後からそれへ出席した。彼女は學校にゐた間は、成績もよかつたし、それに友達思ひの、誰れにも親切な學生の一人であつたので、級中では衆望をあつてゐたのであつた。で、卒業してからも同窓會の常任幹事などに選ばれて、何か事があると、學校の方でも彼女を心にして頼むやうになつてゐたのであつた。

照子は一體に家が質素なので、さうした場合にも銘仙位な着物しか着ることを許されなかつた。福井の家は巨萬の富を擁してゐながら、生活向きは非常に地味で、博士が在世中は無駄な贅澤などはひとつもさせなかつた。それといふのも博士が貧困の間から育つて、刻苦してその富を築き上げたので寧ろ拜金家といはれるほどに勤儉貯蓄の風を重んじた。一切の冗費を省くといふことは家憲のひとつで、家のものはそれを脊々服膺しなければならなかつた。で、總て

の生活振りは極めて合理的で、きちんと極つてゐたので、博士が亡き後も未亡人はその風を承け繼いで一糸も亂れぬといふ風であつた。殊に未亡人は性來が氣の小さな、何方かといふと物惜しみをするやうな性質の人柄なので、金錢の出納などは一層引緊つて來たとさへ云はれてゐた。で、照子なども身のまはりのことなどは殆んど中流の家庭に生れた娘と同様に、極めて地味にさせてあつたのであつた。照子もそれを苦にするやうな風はなかつたが、併し若い娘氣に時々不平を懷くやうなこともないではなないのであつた。

照子はその日は飛び模様のやうな銘仙の着物に袴を穿いて、うへから對の羽織を着て、まるで女學院にゐた時代と同じやうな姿で、學院へ現はれた。却つてさうした風の方が彼女はさつぱりして美しくみえるのであつた。無論往復ともに電車なので、寒い風に吹かれた來た頬は林檎のやうに紅く輝いてゐた。

同窓の誰彼も五人ほど集まつてゐたが、いづれもまだ未婚者なので、話し合ふ話題は極めて無邪氣なことばかりであつた。こゝへ出て來ない同窓生の中にはもう手取早く結婚をしてしま

つたものもゐるので、そんな人々の噂話は先々と弾んでいつた。クリスマスマスの下相談などはもう忘れてしまつた様に皆は小禽のやうに楽しく語り合つて、わあわあ笑ひ轉げてゐた。

それでももう夕方になると、やつとどうやら話に眼鼻がついたので、皆はそろそろ歸り仕度をした。照子は學校時代から一番仲のよかつた桑原といふ醫學博士の令嬢の民子と一緒に歸る約束をしてゐると、そこへもとの先生である英國婦人のミス・ウエリントンといふ舊教の尼さんが出て來て、さも懐かしさうに皆に會釋して廻つた。その尼さんには誰れも彼も懐いてゐたので皆はそのまはりに集まつて、甘えるやうな調子でその後の起居を聞いたりした。

ミス・ウエリントンは黒い僧服のうへに金の鎖で下げた小さな十字架を弄びながら、瘦せた顔に宗教家らしい安らかな笑みを湛へて、

「私、皆さんの丈夫さうなお顔を見て、大變に嬉れしいです。皆さんはこの學校を出てもきつとまだ神様のことはお忘れになるまいと思ひます。その證據には、皆さんの顔に幸福が輝いてゐます。」と、いつて、皆の顔をにつこり見渡しながら、

「折角皆さん、揃つて學校へ来て下さつたんですから、これから禮拜堂へいつて、お祈りを上げませう。皆さんもこれからが幸福になるのです。神様もきつと嬉んで下さるだらうと思ひます。」と、云つて、自分が先に立つて、校庭の向ふに聳えたつてゐる石造の禮拜堂の方へ歩いてゆく。皆もそのあとからぞろぞろ隨いて行つた。

もう廣い校庭には夕影が立つて、白ツ茶けたその面には禮拜堂の影が黒々と長く倒れてゐた空には夕鴉の聲が渡つて、大空に漂ふ雲の腹には紅い夕榮がそろそろ輝いてゐた。

ミス・ウエリントンは禮拜堂へ入ると、今迄と違つた嚴肅な顔になつて、皆を聖壇の下へ列ばせ、靜かに祈禱をさせた。堂の内部には天井のステインド・グラスを透いて流れ込んでくる二條の夕陽が片側の壁だけをほの紅く照らして、そこに据ゑたピアノのぴかぴか光るのまでが妙に空想を誘ふやうな心持ちを湧かせる。ミス・ウエリントンの神に呼びかける祈りの言葉は柔らかな反響を呼んで、一言一言壯重に句切つて云ふのが、何んとも云へない神々しさを現はしてくる。

聖壇の下に跪いた皆は、額に手を當て、各自に心の中で黙禱した。

照子がかうしたお祈りをする時、いつでも心に思ひ起すのは亡き父の面影であつた。彼女は父の在世中は、この世の中の誰れよりも一番彼に懐いてゐたので、今でも決して父のことばかりは忘れなかつた。ふつと思ひ出すと、もう彼女は何かしら胸が痛くなるほど悲しくなつて、時々身も世もあられないやうな切なさを覺えるのであつた。神様は人間の世界に幸福ばかりを分けて下さると思つてゐたのに、事實は反對で、何の悪事も犯さないのに、かうした不幸を下されたことが彼女の處女心には不思議でならないのであつた。

その日も彼女は朝から妙に亡き父のことばかりが思ひ出されてならないので、さうやつて祈禱をしてゐる間も彼女はじいつと亡き父の面影を心の眼に描いてゐた。何うしてお父様はお亡りになつてしまつたのだらうと思ふさへ、彼女は涙含ましい心持ちがして、急に世界が暗くなつてしまつたやうに思はれて來た。

祈禱が済んで、皆はそろそろ歸り仕度をしたが、それでも照子は聖壇の前へ跪いて身動も

しなかつた。

民子は變に思つて、彼女の傍へいつて、やさしい聲で、

「照子さま、照子さま。」と呼んで、「貴女、どう遊ばしたの。もう夕方になりましたから、マダム方に御挨拶をして歸りませうよ。」と、いふ。

照子はそれでも顔を上げずに、唯口の中で、

「え。」と、呟くばかりであつた。

皆はいつの間にか、校庭の方へ出ていつてしまつた。

民子は心配さうな顔になつて、

「照子さま、もう皆さんお歸りになつてしまひましたわ。ほんとに何う遊ばしたの。何處かお加減でもお悪いんぢやないんですの？」と云つて、その顔を覗き込む。

その時照子は双眼に溢れるほど涙を湛えて、いきなり起ち上りながら、ミス・ウエリントンの傍へ縋り寄つて、

「マダム様！」と、云つたきり、その胸に顔を伏せてしまつた。

ミス・ウエリントンは吃驚して、

「お、福井さん。何うしました。」と、云ひながら、その肩を抱いて、

「貴女、どうしました。まあ、氣を鎮めて、譯をお話しなさい。そんなに亢奮してはいけません。私、私は貴女のことを心配してゐます。何んでも貴女のお話聞いてあげます。」と、云つて、そのまゝ照子を傍の長椅子へ腰かけさせた。

照子はもう瀧のやうに流れ出る涙を拭かうともしらずに、

「マダム様。どうかお許し遊ばして下さいませ。私、私、又亡なつた父のことを思ひ出しまして、つひ泣いてしまつたんで御座います。私、父のことを思ひ出すと、ほんとに悲しくて……」

マダムはやさしくその肩を叩いて、

「福井さん、分りました。分りました。貴女のお父様は今神様のお傍で、安らかな永遠の日を送つて被居るのです。貴女、何も悲しむことはありません。貴女のお父様は立派な方でした。」

神様はそれをよく知つて被居います。」と、慰めるやうにいふ。

照子はそれでもまだ涙をほろほろとその頬に流して、

「マダム様。でもでも、私、……」と、云つたつきりまた顔を伏せてしまふ。

民子は呆氣にとられたやうな顔をしてその様をみてゐたが、平常から照子の氣心をよく知つてゐるので、彼女もいつの間にかうすく涙ぐんでしまふ。

マダムは民子も自分の隣りへ坐らせて、十字架を胸に押當てながら、

「福井さん。貴女泣いてはいけません。貴女方は神様を疑つてはいけません。それが此の世の中で一番大きな罪悪なのです。お父様は神様に召されて、天国へいつておしまひなすつた。それは神様の思召しであつたのです。神様は小さなこの世界の幸福よりも、もつともつと大きな幸福を分けて下さる爲めに、お父様を天国へお召になつたのです。ですから貴女、決して悲しいことはありません。」と、云つて、彼女はいかにも敬虔な顔になつて、神の國の輝かしい平和と光明とを説き出した。その言葉は若い女の心を高い大空へ引上げてゆくやうな懐しみはもつ

てゐたが、併し照子には何う考へて、不満足でならなかつた。神様がもう一度この世へ、あの慕はしい父を歸して下さらない以上は、聖者の有難い言葉も何の役にも立たないやうに思はれてならないのであつた。

禮拜堂の中は漸次と寂しく暮れてゆく。壁に映つてゐた夕陽の影が灰色に薄れてくると同時に、もう方々の隅々ではものゝ陰影が濃く沈んで、黄昏の静けさがしみ入るやうに四邊を引込んでくる。その中で照子は首を垂れて、黙つて、マダムの言葉に耳を傾けてゐたが悲しい心持ちは反對に益々深く心に喰ひ入つてくるばかりであつた。

#### 四

それから一時間ばかりの後に、照子はやつと涙ををさめて、民子に連れられて學院の門を出た。戶外へ出てみると寒い空ツ風は横なぐりに吹きつけて來て、街には灯影がぼつりぼつりと瞬いてゐた。

二人は妙に取附場がないやうな心持ちになつて、黙つて歩いてゐたが、照子はその時、學院から歸りに柴山の邸へ寄る約束がしてあつたのをふと思ひ出して、急にいくらか明るい心持になりながら、

「ねえ、民子様、私、ずつと貴女と御一緒に赤坂見附まで参りますわ」と、いふ。

民子も照子が口をきいてくれたので、やつとそれで繼穂が出来て、

「まあ、赤坂見附まで被往いますの。あ、それでは又柴山さんへお寄り遊ばすんでせう。それなら、私もお伴れがあつて都合がよう御座いますわ」と、いふ。民子の家も麴町の平河町なので、紀尾井町にある柴山邸から極く近間なのであつた。

二人はそれから天現寺橋の停留場まで出て、そこから電車に乗つた。幸ひその電車は空いてゐたので、二人は隅の方へ肩を並べて坐つたが、照子は今迄の不思議な心持ちを思ひ出すと民子に心配をかけたのが急に氣恥かしくもあり又氣の毒にもなつて、

「ねえ、民子様、御免遊ばせよ。私、この頃何んだかふつと牛刻みたやうな氣持ちになつて、

何うしても自分で自分が押へられなくなつてしまひますのよ。ねえ、民子様、マダムが癖にお思ひ遊ばしやしないでせうか。」と、低い聲で囁く。

民子もやつと微笑んで、

「あら、變にもお思ひ遊ばさないでせうけれど、でも随分心配して被居いましたわ。ほんとにいつお眼にかゝつてもいゝ方ですわねえ。もう一生懸命になつて、貴女を慰めて被居るんですもの。私、自分までが氣の毒になつて、泣いてしまひましたわ。」と、いふ。

照子は寂しく笑つて、

「ほんとに私、申譯もありませんわ。どうしてかうなんでせうねえ。きつと神経衰弱にでもなつたらうと思ひますわ。」

「ほゝゝゝ。そんなこともないでせうけれど、一體貴女は何んでも氣になさるからいけないんですわ。もう少し何かで始終氣を紛らかすやうにして被居るといゝんですけれど、……。」

照子は兩手を膝のうへに置いて、

「いゝえ、それが民子様、どうしても私出来ないんですの。ふつと父のことを考へ出すともう何うしても我慢が出来なくなつてしまふんですわ。ほんとに民子様、貴女なんかお幸福ですわ御両親とも揃つて被居るんですものねえ。」と、又打沈んでゆく。

民子はどうかしてその話を他へ轉じようとして、

「ねえ、照子様、でも私のところなんか駄目ですわ。父があゝの通りのやかましやなんですもの。私、時々家を飛び出して何處か遠いところへ飛んでいつてしまひ度いやうな心持になることがありますのよ。ほゝゝゝ。ですから私から申しますと、貴女の方がどれだけお幸福だか分りやしませんわ。誰れ一人貴女のお心持ちを壓迫するやうな方もないんですもの。」

照子は少時の間黙つて考へてゐたが、やがて何か思ひ出したやうに、

「民子様、貴女、此間の御結婚のお話どう遊ばして。もうお極りになつて？」と、小聲で訊く。民子は一寸嬌態をして、云ひ澁りながら、

「あの、私、まだ何んとも返事をしませんの。父はもうやいやいやい申しますんですけれど、私

何んだか、まだ結婚なんていふことはちつとも考へてゐないんですもの、厭ですわ。」

「でも、静子様のお話ぢや、貴女も大變に先の方がお氣に入つてゐるんだつていふぢや御座いませんか。私にお隠し遊ばすのはあんまり水臭う御座いますわ。」

民子はちよつとてれて、

「あら、氣に入つてゐるなんて、嘘ですわ。静子様も随分ですわねえ。私、氣に入つてゐるどころぢやありませんの。ほんたうは何んだか、氣乗りがしないんで、困つてゐるんですわ。」と、云つて、伏眼になりながら、「あの、私それぢや打明けてお話ししてしまひますけれど、實は先の方は醫學士なんですのよ。大變によくお出来る方なんださうですけれど、私………」と云ひかけて、ふつと照子の方をみながら、

「ねえ、照子様、お笑ひ遊ばしちや厭ですよ。あの、實はねえ、その方は子供の時に火傷をなすつたとかいつて、そりやシヤンぢやないのよ。それに結婚するとすぐに臺灣の病院へ赴任しておしまひなされるんだつていふんですもの、私、それが厭なんですの。」

「まあ、臺灣へ？ そりや大變ですのねえ。」と、云つて、照子は民子の方をみたが、「でもそんなにお出来になる方なら、前途有望ぢやないの、お年はお幾歳？」

「さあ、私、よく伺はなかつたんですけれど、何んでももう三十三四におなりになるんですつて。随分おぢいさんですわねえ。」と、いつて、民子は片手で頬を支へながら、「私の父は同じ職業だもんですからもう大變に乘氣になつてゐますのよ。傍でみてゐると可笑しい位なんですのそれにほんたうのことをいふと、先方では静子さんの方へも口をかけてゐるらしいんですわ。ですからそりや可笑しな關係になつてゐるんですの。そんな關係できつと静子さんは貴女にそんなことを仰有つたんですわ。私、静子さんなら、あゝいふ氣性の方ですから、いゝだらうと思つて、もう何うかして彼方とうまく極つて呉れゝばいゝと思つてゐるんですわ。」

静子といふのはやつぱり同窓で、これは農商務省の或局長の愛嬢であつた。二人とも仲の好い、友達で始終往來してゐるのであつた。

照子は黙つてその話を聞いてゐたが、どうしたのか、思はず深い嘆息を吐いた。民子はそれ

を見咎めて、

「照子様、それはさうと、貴女は何う遊ばすの。もうきつとお極りになつたんでせう。私貴女は柴山さんの光雄様のところへ被往るんだつていふ噂を聞きましたけれど、ほんとにさうなんですの？」と、あけすけな態度で訊く。

照子はふつと頬を染めて、

「あら、厭な民子様、そんなそんなことありやしませんわ。そりや誰方かゞ勝手にそんな嘘をおこしらへなすつたんですわ。」と、打消して、「私、結婚なんて、考へるだけでも厭ですわ。私はお出来ることなら一生獨身でゐたいんですの。マダム方のやうな淨い一生を送ることが出来たら、私、どんなにいゝだらうと思ひましてねえ。」と、いふ。その顔には眞實さう思つてゐるやうな色が現れてゐた。

民子は賢さうな眼つきになつて、

「でも照子様、そんなこと出来やしませんわ。マダム方はあれでいゝでせうけれど、私、随分



寂しい一生ぢやないかと思ひますわ。戀にでも破れたら、私だつてあゝなり度いと思ひますけれど、このまゝ尼さんになつてしまふなんて、私、却つて虚偽だと思ひますわ。」

「でも、私、自分ではさう考へてゐるんですの。私、母さへ許して呉れたら、それこそほんたうにトラピストへでも、なんでも行つてしまひますわ。私の一生はどうせ寂しいんですもの、神様がさう極めて下さつたやうな氣がして、私、此頃ではもうその他の望みはないんですわ。」と、照子はしよんぼりした調子でいふ。

民子は笑つて、

「まあ、可笑しな照子様ねえ。貴女はときどき變なことを仰有るのねえ。それも何か胸の中に煩悶がおりなされるからですわ。貴女、ひよつとしたら、戀でもなすつて被居るんぢやなくつて？ それでなけりや變だわ。」

さういはれると照子は又頬を染めて、

「あら、私、そんな呑氣なことなんか考へてゐやしませんわ。そんなことが出来る位なら私、もつともつと此の世の中が楽しく暮らせる筈ですわ。」と、云つて、彼女は顔を背けてしまふ。

民子はうすく笑ひながら、

「照子様、貴女お隠しになつても駄目よ。私、知つてますわ。」と、云つて、何喰はぬ顔で、

「さう云へばあの柴山さんの光雄様はほんとにシヤンな方ねえ。私、時々平河町の通りでお眼にかゝるんでけれど何んだか極りが悪くつて御挨拶が出来ないんですの。いつか貴女のお宅で紹介して頂いたもんですから、彼の方は私の首を覚えて被居つて、向ふからお笑ひになるんですけれど、私、變でねえ。」

そんな話をしてゐるうちに、電車は赤阪見附の上へ來てしまつた。民子はそれをみると慌てて、

「あら、照子さま、もう赤阪見附よ。さ、下りませうよ。」と、いつて、自分が先に起ち上る。照子も吃驚して、續いて電車を下りた。

電車を下りると、もう四邊はいつの間にか眞暗になつて、寒い風が砂塵をあげながら吹きつけてくる、民子は肩を縮めて、思はず、

「お、寒い。」と、いつたが、「ねえ、照子様、もうこゝでお別れしなけりやなりませんのねえ。」と、寂しさうにいふ。

照子もその四つ角のところへ立つて、少時の間名残を惜んでゐたが、さうしてゐるうちにも時間が経つので、やがて二三日内には是非遊びに来て呉れるやうにと約束をして、右と左に袂を分つた。民子は、

「ねえ、照子様、光雄様によろしくね。」なぞといつて、宵闇の中で笑つてみせたりした。

## 五

柴山伯爵の邸は北白川の宮邸の横手にあつて、夜目にも白い花崗石の塀で取廻はした堂々たる一構へであつた。常緑樹の庭樹を通してどつしりした洋館がみえ、その窓には明るい光が溢れてゐた。

てゐた。

照子は静かな足どりで門を入つて、突當りの玄關へいつて、扉をノックすると、いつもの書生が取次ぎに出て来て、すぐに奥へ知らせにゆく。と、間もなく奥の方からは大きな足音が聞えて、光雄が平常着の大島の着物を着て、にこにこ愛想よく笑ひながら出て来て、

「お、照子さん、よく来て呉れました。もう先刻から待つてゐたんですよ。」と、気軽に云つて

「大變に遅いぢやありませんか。何處でそんなに道草を食つてゐたんです。どうもいけませんなあ。はゝゝゝ。」と、いふ。

照子は一寸嬌態をして、

「あら、私、道草なんか、ほゝゝゝ。」と、力めて笑つて、「あの、今日は學校の方で手間がとれましたもんですから、大變に遅くなつてしまつて失禮いたしました。」と、いふ。

光雄は手を執らんばかりにしながら、

「いや、失禮なことなんかありませんよ。来てさへ下さればそれでいゝんです。さ、まあお上

んなさい。」と、云つて、自分でスリツパを揃へてやつたりする。

照子はそのまゝうへへ上つた。

光雄は先へ立つて案内しながら、

「ねえ、照子さん、今夜は幸ひ此間お話しした畫家の松谷君も来てゐるんですよ。丁度いゝから貴女に御紹介しようと思つて、引留めて置いたんです。」と、云つて、そのまゝつと奥の自分の書齋へ照子を連れてゆく。

そこはこぢんまりした洋館で、とても學生の書齋とは思はれないほど立派な室であつた。真中に大きな卓子が据ゑてあつて、その周圍には四五脚の椅子や安樂椅子が置いてある。壁際にはオークの本棚があつて、その中には洋書や参考書のやうなものがぎつしりつまつてゐる。大理石の像や、油畫の額や、人形棚のやうなものが、その間に巧みに按配してあつて、二つに枝をさした電燈の光はすべてのうへに明るく輝いてゐた。

光雄は扉のところまで逡巡してゐる照子に、

「さあ、照子さん、お入んなさい。そんなに遠慮しないでついでせう。はゝゝゝゝ」と、云つて、自分の椅子へいつてどつかと腰を下ろす。

照子も室の中へ氣を兼ねながらやつと入つていつたが、ふとみると丁度正面のところに、細面の、如何にも神経質らしい、美しい顔の青年が蓬髪にした頭に手を當てながら此方をみてる。脊廣服は着てゐたが、併し、それも醜くない程度に汚れて、方々に繪の具のあとがついてゐたりした。

光雄はその男の方をみて、

「松谷君、これが今話した福井照子さんだ。照子さん、これが松谷隆君です。」と、紹介する。照子は場合が場合なので、黙つて丁寧に辭儀をしたが、松谷はいかにも傲慢らしい態度で、黙つて椅子から立つて挨拶だけする。

光雄はその間を取做すやうに、

「いや、照子さん、あなたがあんまり遅いもんですから、松谷君は歸るかへるといつて、どう

しても承知しないんですよ。は、は、は。まあ、い、鹽梅に御紹介が出来て、よかつた。」と、云つて、「さあ照子さん、此處へおかけなさい。そんなに遠慮してゐると却つて可笑しくなつてしまひますよ。さ、お懸けなさい。」と、いつて、照子に、自分の隣りの椅子をすゝめる。その様子には、態と照子と親しいのを松谷にみせつけるやうな風があつた。

照子も微笑みながらその椅子に腰を下ろした。

光雄は自分で紅茶をついで、彼女にすゝめながら、

「今日はたしか學院で何かの相談會とかどあるとかいふ話でしたが、それでこんなに遅くなつたんですか。」と、いふ。

照子は顔を伏せて、

「え、もうそろそろクリスマスが近くなつて來ましたもんですから、その相談で集まりましたの。」照子は見知らぬ松谷がゐるので、妙に話の繼穗がないやうであつた。

光雄は合點いて、

「クリスマスですか。どうもミツシヨン・スクールは年中行事が大變ですなあ。は、は、は。それに若い女の人ばかりだから、相談會といつても、却々まとまらないんでせう。何か又ベエージエントか何んかあるんぢやないんですか。」

「え、何んですか、皆さん、大層騒いで被居いましたわ。在學生の人達で、今度は受難劇を遊ばすんですつて。」

「受難劇を。は、は、は。そりや大變だ。役者ばかり多くつて、幕の上げ下ろしをしたり、背景を受持つたりする人がないんぢやないですか。は、は、は。」と、笑つて、光雄は松谷の方をみながら、「どうです、ひとつその背景を松谷君にでも頼んだら。松谷君のことですからきつと、面白いものが出來ますよ。ねえ、松谷君、何うです。」などといふ。

松谷は一寸鼻の先で笑つて、何んとも返事をしなかつた。彼は可笑しい位じつと瞳を据ゑて先刻から照子の顔ばかりみてゐるのであつた。その瞳には少しも熱といふものがなくて、何かを探り求めるやうな、透視するやうな光が輝いてゐた。

照子は氣味が悪くさへ感じてゐるのであつた。

光雄はそれでも平氣な顔で、今度は又照子の方をみて、

「照子さん、それで貴女も何かひと役やるんですか。そりや見物ですなあ。」と冷笑すやうにいふ。

照子は小首を傾げて、

「あら、私、そんなものに、出や致しませんわ。私達の方はバザーを致しますんですもの。」

「バザーを？ そりやいゝ。何を賣るんです。又いつかのやうに、町で買ふと十錢位なものを五圓にも十圓にも人をみて賣るんぢやないんですか。今年はあるな目に逢はせると、戦時利得税をかけられますよ。あんまり暴利過ぎますからなあ。」

「あら、でもどうせ慈善會なんで御座いますもの。お買ひになる方はそのおつもりで買つて頂かなけりや困りますわ。去年は養育院へ寄附しましたけれど、今年も獨逸の貧兒救濟團へ送るんださうで御座いますから、大いに賣らなけりやなりませんの。」さういひながら、照子は漸次

と氣持ちが軽くなつて來るのを覺えて、いつものやうに、少しづつ快澗な顔色になつてゆくのであつた。

その時松谷はどうしたのか、急に沈黙を破つて、

「や、どうも失策つた。彼處が可けないんだ。」と、獨語のやうなことを呟く。

光雄も照子も吃驚してそつちをみたが、松谷は大きな眼に何かしら不満足さうな色を浮べて、まだまじまじ照子の顔をみてゐる。

光雄は笑つて、

「なんだ、松谷君、吃驚するぢやないか。一體君は何を考へてゐるんだね。可笑しな男だ。」と、大風にいふ。

松谷は眞顔で、

「いや、僕はあの福井博士の肖像をすつかり失策つてしまつたんです。どうもあの眉のところか氣になつてならなかつたが、なるほど此の方の眼をみてゐると、すつかり分つた。どうして

も直さなけりや可かん。」と、頭を振りながら、性急にいふ。

光雄は笑つて、

「はゝゝゝ。何んだ、その事を云つてゐるのか。實に頓狂な男だ。」と、云つて、照子の方へ、  
「ねえ、照子さん、松谷君はこの通り氣狂染みてゐるんですよ。藝術家なんていふものはかう  
なくちやならんのかも知れないが、併し時々吃驚させられるんで閉口ですよ。はゝゝゝ。」

照子は何とも答へずに、唯美しく微笑んでゐた。彼女は松谷の方をみようとは思つても、何  
んだか正視するのが恐いやうな氣がして、あらぬ方へばかり眼をやつてゐた。彼女の心には、  
反感らしいものが漸次と頭をもたげてくるのであつた。

光雄はやがて何か思ひついたやうに、

「ねえ、照子さん、それはさうと、父も母もみませんけれど、皆で一緒に食事をしようぢやあ  
りませんか。もう少しすると支度が出来ますから、どうかそのつもりでゐて下さい。」といふ。

照子は其顔を見返して、

「有難う御座いますけれど私、それではあんまり遅くなりますから、……あの今日は一寸お邪  
魔をして、すぐに歸るつもりで伺つたんですから。」

「いや、そんなことを云つちや可けませんよ。家でお母さんが御心配なさるやうなら、今電話  
をかけさせますから。」と、いつて、すぐに呼鈴を押す。

電鈴に答へて、小間使がやつて來ると、光雄はすぐに福井の邸へ電話をかけて、心配しない  
やうに申傳へると命じた。そして又熱い紅茶を皆の茶碗に注ぎながら、

「もし遅くなつたら、邸の自動車で僕と一緒に送るから、心配しないで下さい。柏木ま  
でとすもの、こゝから三十分もありやいつてしまひますよ。」と、いふ。

やがて小間使は歸つて來て、今の返事を傳へた。未亡人は自身で電話へ出て來て、九時にな  
つたら、此方から啓二郎を迎ひに出すから、それまでゆつくりお邪魔をして來いといつたとい  
ふ。

光雄はそれを聞くと、又笑つて、

「はゝゝゝ、啓二郎さんの迎へはいゝですね。あの人なら、護衛兵にや持つて来いだ。はゝゝゝは。」と、云ふ。

照子も思はず噴笑してしまつた。

## 六

照子は自邸からさういふ返事がきたと聞くと、何んだか歸れなくなつてしまつた。彼女はあの晩はたつた一人で奥の自分の居間へでも引籠つて、又亡き父の思出を泣き度いやうなしんみりした心持ちになつてゐるので、かうした席にゐるのが、妙に氣塞りで耐らなかつた。でも仕方がないので、膝のうへで綺麗な指先などを弄びながら、ぼんやりしてゐた。

そのうちに、小間使が食堂の支度が出来たと云つて来たので、光雄はやがて松谷と照子を自分で案内して、表の方の洋館の食堂へいつた。そこはつい二年程前にすつかり設計換へをしたので、眼の覺めるやうな明るい、美しい室であつた。真中に置かれた四角な卓子は、純白な卓

布掛で掩はれて、そのうへには野菊の盛花の美しいのが咲き零れてゐて、三人前の食器がきらきら輝きながら體裁よく並べてあつた。周囲の四壁に飾つてある食器棚や額面や三角棚がいかにも美しく光つて、窓掛までが見るから贅澤な感じを湧かせる。天井には玻璃の瑤瑤の下つた小型の飾電燈が柔かい光を振りこぼしてゐた。

光雄はいかにも場馴れた調子で主人の席へ就きながら、

「さ、照子さん、貴女、僕の隣へ坐つて下さい。松谷君、君はその正面のところへ着席して呉れないか。」などと頻りに斡旋する。

二人が席に就くと、光雄は小間使の方を顧みて、

「おい、今夜は松谷君がゐるから、葡萄酒の他に、ウキスキイを持つて来て呉れ。」と、命じて今度は照子の方をみながら、愛想のいゝ調子で、

「ねえ、照子さん、今夜は華族會館で夜能があるんで、父も母も大喜びで出ていつたんですよ。煩い年老り連がゐないんで、鬼のゐないうち生命の洗濯といふ形がありますなあ。はゝゝゝ

は。この三人きりなら、何をしたつて、構はないから、どうか今夜はゆつくりしていつて下さい。別に御馳走もありませんけれど、コツクにさう云つて、貴女の好きなものばかり拵へさせて置きましたから。」と、いふ。

照子は頭ばかり下げてゐた。

小間使が酒を運んでくると、光雄は先づウキスキイを松谷の洋盃へ注がせ、自分も笑ひながら洋盃を出して、

「俺にも少し注いで呉れ、お父さんや母さんが被居ると煩いが、今夜は例外だ。」なぞと、云ひながら、洋盃に半分ほど注がせる。そして照子の洋盃には白葡萄酒を注がせて、

「さ、照子さん。それならそんなに酔ひもしませんから、飲んで御覽なさい。それは佛蘭西のシャットウ・ラファイターとかいふすばらしい酒ださうで、實は宮内省からの御下賜品なのですよ。」と、云つて、松谷の方を向きながら、「どうだ、松谷君、君も少しやつてみないか。」と、いふ。

松谷はナフキンをはさみながら、手を振つて、

「いや、僕はもう澤山です。白葡萄酒なんでもものは、貴族の飲む酒で、僕等の生活には全然無意味ですからなあ。僕はこのウキスキイがありやもう澤山です。」と、云つて、さもうまさうにかつと呷る。彼は酒に對して異常な嗜好をもつてゐるとみえて、洋盃をみる眼は歡びに輝いてゐた。

料理は一皿一皿小間使の手で運ばれて來た。照子もそつとフォークやナイフを取り上げてその皿へつゝまじやかに手をつけてゐたが、光雄はその一舉一動をそれとなく眼で追ひながら、いかにも満足らしい態度で自分も料理を平らげたり、酒を飲んだりしてゐた。そのうちに酒の弱い彼はもうぼうつと双頬を紅くして、

「照子さん、貴女はちつとも白葡萄酒を飲まないんですねえ。それなら酔やしないから、少しお飲みなさいよ。」と、笑ひながら云つて、

「あゝ、僕はたつた一杯のウキスキイでもうぼうつとしちやつた。」と頬を撫でる。



照子も仕方がなしに、白葡萄酒の洋盃へ少し口をつけたが、その一口の酒が何んだか體中に廻るやうな氣がして、いくらか心持ちが浮き立つて來た。

漸次皿が代つてゆくうちに、皆の間の話も弾んで來て、殊に松谷は意氣軒昂といつたやうな様子になりながら、頻りに畫のことを語りだした。さうなると彼は今迄の皮肉な、とげとげしいやうな態度はまるでなくなつて、藝術家らしい人の好さと、熱意とをみせて來た。それと同じ時に、彼の陰鬱な顔も華やいで來て、男性らしい美しさが漲り溢れてくる。

松谷は大膽に照子の方をみながら、

「貴女、僕はさつきも申したとほり、貴女のお父さんの肖像畫に非常な缺點を見出したのですよ。で、それだけはどうしても直して置かうと思ひますから、どうかもう一度僕の方へ返して頂けないでせうか。」と、突然云ひ出す。

照子も彼の方をみて、

「あの、もうあれで大層結構だとは存じますが、でも、御不満の點が御座いますのなら、い

つでもお届けいたしますわ。」と、いふ。

光雄は少時の間でも照子との話を他人に奪はれるのが厭さうに、口を入れて、

「それぢや君、松谷君、何もあんな大きなものを彼方へ持つていつたり、此方へ持つていつたりするよりも、いつそのこと、福井さんの邸へ君自身で出向いていつて、あすこで筆を入れたらいぢやないか。さうすりや第一面倒がなくていゝと思ふがなあ。」といふ。

松谷は腕組みをして、

「さ、さう願へりや好都合なんだが、併し、知らない人の家へいくのは、どうも氣がひけてねえ。」

「はゝゝゝ。又例の癖が出たね。笑談ぢやない。ねえ、照子さん、この松谷君はこんな顔をしてゐて、存外これで含羞家なんだから、可笑しいぢやありませんか。はゝゝゝ。」

照子も美しく笑つて、

「あの、もし宅へお出で下さるんでしたら、私の方は猶ほ好都合で御座いますわ。私、母とた

つた二人きりで御座いますから、お構ひは出来ませんけれど、……」と、いふ。  
松谷は頭を掻いて、

「いや、正直のところ、どうも僕は……」と、云つて、子供のやうな無邪氣な様子をして、

「あの、お宅へ伺つても、何方にも顔を合はせず仕事の出来るやうな工風はありますまいかなあ、面倒臭いお辭儀なぞをしてゐるうちに、僕は折角の感興がなくなつてしまふと困るですからなあ。」

光雄は腹をかゝへて笑ひながら、

「はゝゝゝ。面白いことを云ふねえ。そりや譯のない話さ。君、福井さんの家は廣いうへにお母さんと照子さんと二人きりなんだもの。洋館の方へでもいつてゐりや、一日人氣なんかありやしないよ。ねえ、照子さん。」

照子も笑ひながら合點いて、

「え、ほんとにさうで御座いますわ。さういふお望みなら、洋館の方でお仕事を遊ばすやうに

支度をさせますから。」と、いふ。

いろいろ話し合つた末、松谷は、それではこの次の日曜日に一度福井邸を訪ねるといふことになつた。松谷は仕事の都合でも考へてゐるやうに、少時の間、考へ込んでゐたが、やがてさも云ひ憎さうに、

「いや、それから、もうひとつお願いし度いことがあるんですが。その、その時に、是非貴女に三時間ほどモデルに立つて頂き度いんですが、お許し下さるでせうか。」と、いひだす。

照子は紅くなつて、

「あら、私なんか。……」と、云つたが、光雄はそれを大仰な表情で受けて、

「いや、松谷君、そりやいゝ。そりやいゝところへ氣がついて呉れた。僕はいつからかこの照子さんの肖像が欲しいと思つてゐたんだが、そりやいゝ。君、是非描いて呉れないか。君ならきつと面白いものが出来ると思ふ。ねえ、照子さん、是非モデルになつてやつて呉れませんか。もしそれが出来上つたら、松谷君が何んと云つたつて、僕が貰つて、僕の書齋へ飾るんだから。」

といふ。

照子は恥かしさうな嬌態をして、

「あら、私、厭で御座いますわ。私、寫眞を寫すのさへ恥かしいんで御座いますもの。とてもモデルになんかなれやいたしませんわ。」

光雄は笑つて、

「は、は、は、は。いや、さう遠慮しちや可かんですよ。兎に角、松谷君、今度の日曜日には僕が君を誘つて一緒にいくから、萬事僕に任せて置き玉へ。照子さんがいくら可けないといつたつて僕がうまく説きつけてしまふから、大丈夫さ。だから君、ちやんと畫枠の用意をして置き玉へ。は、は、は、は。」

松谷はもう酔つて来て、自分で頻りにウキスキイを注いでは飲んでゐたが、やがてその話はその話として置いて、急に何か思ひついたやうに、

「ねえ、柴山さん、まだもつとお料理は出てくるんですか？」と、だしぬけにつかぬことを訊

く。

光雄は笑つて、

「さあ、もう二品ぐらゐ来るだらう。何うしてそんなことを訊くんだね？」

松谷は頭を振つて、

「まだもう二品？こりや驚いた。貴族なんていふものは、これだから僕は嫌ひだといふんです。第一こんなに澤山いろんなものを出したつて、僕等の食慾ちや到底食べられやせんぢやないですか。貴族なんていふものゝ胃袋は出来が違ふんですね。馬鹿々々しいもんだ。」と、眞顔で云つて、そろそろ椅子から立ちながら、「僕は、もう澤山ですから、これで失敬しますよ。何んだか急に淺草へいつてみたくなつたから、失敬します。」と、不遠慮にいふ。

光雄は大きく笑つて、

「は、は、は、は。實にどうも松谷君は面白い人だねえ。だがまだいゝぢやないか。そんなに食べたくなけりや、もうこれで君には上げないからもう少し話していかないか。」

松谷は背廣の釦をとめながら、駄々ツ兒のやうに頭を振つて、

「いや、僕はもうかういふ世界には反感が起つたから、いくら止めても駄目ですよ。でも酒はうまかつた。」と、云つて、ジョニウオカーの燻をのぞいてみながら、「よう、まだ大分残つてゐるな。ねえ、柴山さん。これ僕貰つていきますよ。僕等のやうな貧乏人は實際こんなうまい奴を飲んだことがないから、これを貰つていつて、仲間の奴等を驚かしてやるんです。自分で買ったやうな顔をしてね。はゝゝゝゝ。」と、自分でも可笑しさうに笑つて、光雄が「いゝとも悪いとも、云はない先に、もう酒燻をとつて、無理にポケットへ押込みながら、「これがありやい仕事が出来る。それぢや失敬します、又いづれ。」と、云ひ捨てゝ、つかつか室の外へ出ていつてしまつた。

照子も給仕の小間使達も我慢が出来なくなつて、噴笑してしまつた。光雄も笑つて、「實に面白い男だ。あんなさつぱりした、藝術家氣質の男は滅多にありませんなあ。あんなに貧乏をしてゐながら、酒以外にはまるで慾といふものがないんだから、可愛いですよ。はゝゝ

はゝ。」と、照子の方をみながら笑つて、彼は又次の皿へ手をつけた。

## 七

間もなく食事はすんだので、珈琲は書齋で飲むからといつて、光雄はまた照子を連れて書齋へ歸つていつた。松谷がゐなくなつたので、照子は光雄とたつた二人きりでゐるのがその晩は妙に氣塞りだつた。早く啓二郎が迎ひに来て呉れゝばいゝと思つて、煖爐のうへの飾時計をみると、まだやつと八時だつた。

光雄は酒の酔ひで眼まで濕ませながら、一人で饒舌つてゐたが、照子が反對に黙り込んでしまつたので、ひどく物足りなさうに、

「ねえ。照子さん。あんな今夜は變ですねえ。何んだか馬鹿にふさいで居るぢやありませんか。」と、顔を寄せながらいふ。

照子は眼だけあげて、

「別に鬱いでゐるつていふんでもありませんけれど、あの、私にはこんな日が時々あるんですの。何んだか、妙に亡りました父のことばかりが思ひ出されて、もう何をするのも厭で仕様がないうで御座いますわ。」

光雄はその美しい顔から眼をはなさずに、態とらしく笑つて、

「いや、そりや青春時代のメラソリーの一種ですよ。我々のやうにやつと人生に眼覺たものには、よくやつてくるやつですよ。」と、云つて、突如に、「ねえ、照子さん、」と、云つて、光雄は膝のうへに置いてゐた照子の手をついと握る。

照子はびつくりして、思はずその手を振り離さうとしたが、それと一緒に光雄の眼と自分の眼が合つたので、直紅になりながら、

「あら、光雄さま。私、厭ですわ、御笑談をなすつちや。」と、口の中でいふ。

光雄は何んにも云はずに彼女の柔かい手を弄びながら、黙つてゐたが、やがて又それをそつと放して、態と大きな聲で笑ひながら、

「は、は、は、は、は。かうやつてゐると、ラブ・シーンみたやうですね。兎に角、僕にしる、貴女にしる、もう少し大膽に何んでも云へるやうにならなけりや駄目ですよ。唯徒らに恥かしがつてばかりゐて、心の中にあることも云へないやうぢや駄目だと思ふんです。」と、譯の分らぬことを云ふさう云ひながらも、彼はひどく興奮してゐるやうに、肩で息をしてゐた。

いつもの照子なら、こんなことを云はれても平氣でゐられるのだが、その晩は何かしら光雄の胸の底まで見透かされるやうな氣がして、ひどく淺猿しかつた。彼女は唯黙つて、又指先を弄びながらじいつとしてゐたが、光雄がさうした態度を曲解して、ともすると、又肩へでも手をかけさうな様子なので、彼女は態と椅子を後へずらしてしまつた。

丁度そこへ扉を叩く音が聞えて、小間使が顔だけみせながら、啓二郎が迎へに來たことを傳へてきた。

照子はそれを聞くとほつとして、そろそろ立ち支度をしながら、

「どうもいろいろ御馳走様になりました、……。」と、態と平氣を装ひながらいつた。

と、光雄は掌の中の玉を奪はれたやうな物足りなさうな顔をして、

「照子さん、まあ、いゝぢやありませんか。啓二郎さんに彼方へ上つてゐて貰つて、もう少し話していつて下さい。今貴女に歸られてしまつちや僕が寂しくて耐りませんもの。」と、無理にも引留めようとする。

照子はそれでも椅子から立つて、

「でも、私、あんまり遅くまで御邪魔をしてゐると何んですから。」と、云つて、につこりしながら、「あの、それでは今度の日曜日にお待ち申して居りますから、きつと被來つて下さいましな。」と、いふ。

光雄も椅子から立つて、

「いや、日曜は日曜として置いて、もう少し居て下さいな。ほんとにいゝぢやないですか。まだ九時二十分前ですもの。そんな意地の悪いことを云はないでさ。照子さん。」と、手をとらんばかりに云つて、「それとも貴女、僕を警戒してゐるんですか。」と、それでも笑ひながら云ふ。

照子は嬌態をして、

「あらそんなことを仰有つちや厭ですわ。警戒するなんて、そんな、意味ぢやないんですわ。これから歸りますと、十時になつてしまひますもの。」と、云つて、到頭ほんたうに扉の方へ出てしまふ。

光雄も仕方がなくなつて、送つて來ながら、

「仕様がな照子さんですわねえ。折角面白く話してゐたのに、随分ですわねえ。」などと云ひながら、自分も廊下へ出て來て、「それぢや日曜にはきつと松谷を連れていきますから、どうかそのつもりでね。お母さんにも呉れぐれもよろしく。」

照子が歸ると聞いて、小間使達も皆送りに出て來た。

玄關へ出てみると、その薄暗がりの處には啓二郎が大學の制服制帽で、ぼんやり立つてゐたが、光雄の姿をみると、彼は角帽をとつて丁寧に挨拶する。

光雄はそれを軽く受けて、

「や、啓二郎さん、態々御苦勞でした。それぢや照子さんをお預けしますから、どうかよろしく護衛をお頼みます。はゝゝゝゝ。」

啓二郎は唯笑つてゐた。

照子はそので別れを告げて、やがて啓二郎と二人で柴山邸の門を出たが、暗い往來へ出るとどうしたのか、照子は何んだか急にじりじりして来て、何ういふ譯ともなしに溫和しい啓二郎に我儘が云つてみたくて堪らなくなつて來た。彼女は尖つた聲で、

「啓二郎さん。私ほんとに困つちやつたわ。あんたが早く迎ひに來て呉れないもんだから私、どうしようかと思つたわ。」と、いふ。

啓二郎は眞正直にそれを受けて、

「やあ、遅かつたんですか。そりや失敬しました。伯母さんが九時までに柴山さんへ行きついでゐるやうにつて仰有つたもんですから、少し早めに出て來たんですけど、……」と、恐縮してゐるやうにいふ。

照子はすんすん先へ歩きながら、

「九時つて、もうあんた九時つと過ぎてゐてよ。」と、彼女は反抗するやうに云つて、「他人様のお宅へお邪魔に上つてゐるのに、九時ぢや遅いわ。八時頃お暇をしないぢや彼方だつて御迷惑だわ。」と、いふ。

啓二郎は小首を傾げて、

「停車場の時計が八時半だつたんですから、まだ九時前だらうと思つてゐたんですが、併しそりやお氣の毒なことをしました。僕が悪かつたですから、許して下さい。」と、率直にいふ。

照子はもうそれには返事もしなかつた。こんなことを云つては啓二郎に氣の毒だと知つてゐながら彼女はどうしても自分に打克つことが出來ないのであつた。

やつとのことで電車で四谷まで出て、それから省線の電車に乗ると、いゝ鹽梅にひどく空いてゐたので、照子は啓二郎と向ひ合ひに座席へ腰を下ろした。彼女は襟卷ですつかり顔の半分を掩つて、じいつと俯向いてゐたが、啓二郎は腰をかけるとすぐにポケットからノートのやう

なものを取り出して、寸刻の間も惜しいやうに一生懸命に読みだす。

照子はその様を上眼でじいつと偷むやうにみてゐたが、さうした啓二郎の自分に無關心な態度がどうしたものか堪らなく腹が立つてきた。もう少し何かしら自分に構つて呉れてもよさうなものである。もう少し何んとか自分のことを思つて呉れてもよさうなものである。彼は感情といふやうなものはまるでないのであらうか。戀などといふものを彼は少しも感じないのであらうか。若い女とたつた二人きりで歩いてゐながら、何といふ頑くなく心であらうと思ふと、照子は啓二郎をこのうへもない侮蔑の心をもつてみずにはゐられなかつた。

翻つて今別れて来た光雄のことを思ふと、彼女は彼に對しても或不満を覺えずにはゐられなかつた。今になつて考へてみると、光雄がもつともつと何うにかして呉れさうなものである。握られた手の温みはまだ心に残つてゐたが、それでも彼女は何んだか耐らなく物足りなかつた。そしていろんなことをあけすけに饒舌る光雄がその晩は妙に厭だつた。その心持は一寸説明の出来ないやうな形で、彼女は唯無上にもだもたしながら嘆息を吐くばかりであつた。自

分はあの光雄を何う思つてゐるのであらう。果たして戀をしてゐるのであらうか。今迄は確かに戀してゐると思つたやうなこともあつたが、現在とは思ふと、彼女は自分で自分の心が分らなかつた。

照子はごとごと腹の底まで響きあがつてくる鐵輪のどよみを聞いてゐると、急に泣き度くなつて来た。

八

その次の日曜日 came.

その日は朝からどんよりと曇つてゐて、云ひやうもないほど陰鬱な、うすら寂しい日であつた。北風はびゆうびゆう雑木林の梢を鳴らして、今にも時雨が落として來さうな空合であつた。照子は何んだか朝から心寂しくて、いらいらして耐らなかつた。今日は光雄と松谷が來て呉れる日だと思ふと、いくらか慰められて、頻りに二人の來るのが待たれたが、併しどうしたの



か、午後一時の約束の時間になつても二人は姿をみせなかつた。

待ち兼ねて、柴山の邸へ電話で聞かせてみると、光雄はもう午餐をすますと、すぐさま出懸けたといふ。照子はさうと聞くと、猶ほのこと待ち遠しがつて、もうじりじりしてゐると、やつと三時ぢかくなつて、光雄は松谷を連れてひよつくり姿を現はした。

照子は小間使が二人の來訪を通じてくると、自分で玄關へ出ていつて、此前とはまるで違つた調子で、

「あら、光雄様。ほんとに貴方随分ですことねえ。私、一時においで遊ばすつていふから、今迄どんなに首を長くしてお待ち申したか知れせんわ。ほんとに厭な方ねえ。」と、嬌態をしながらいふ。

光雄はもう嬉れしくて堪らないやうに、

「いや、どうもお待たせして失敬しました。實は松谷君のところへ誘ひにいつたら、この人が居ないもんですから、やつと行方を捜して連れて來たんで、それで遅くなつたんですよ。はゝ

はゝ。」と、云つて、靴をぬがうとするのを、照子は押し止めながら、

「あら、光雄様、お待ち遊ばせよ。あの先日の松谷さんのお話のやうに、今日は誰れともお顔をお合はせにならないやうにして置きましたから、どうか庭の方へお廻り遊ばして下さいましな。私、御案内いたしますわ。」と、云つて、自分もすぐさま下駄をはいて下へ下りてくる。

光雄は、照子が心から歓迎して呉れるのが嬉れしくて、包みきれないやうな笑ひを始終唇のあたりに浮べながら、氣分も輕さうに、

「や、どうもこの松谷君には呆れましたよ。あれほど約束して置いたのに、感興が向いたとか云つて、今日は早くから、深川へ寫生に出懸けてしまつたといふのです。僕はもう腹が立つてねえ、宿の人に聞くと、何んでも深川の永代の附近を描きにいつたといふんで、それから自動車で大急ぎで永代橋のところへいつてみたんです。と、あすこの橋詰めから一寸入つたところにこの人が馬鹿な顔をして、帆船を寫生してゐるんですよ。僕はもう氣が急いでならないから、何んでも自働車に乗れといふんで、無理やりに乗せてしまつたんです。ですから御覽なさい。

この通りまだ松谷君は御機嫌が悪いんですよ。はゝゝゝゝゝゝ。」

さう云へば成る程、彼は今日の空模様と同じやうな陰鬱な顔をして、片手に繪具箱と、半ば描きかけた帆船の群の繪を下げてぼんやり突立つてゐる。

照子は聲高にほゝと笑つて、

「まあ、そりやお氣の毒で御座いましたわねえ。ほゝゝゝゝ、折角お氣が向いて、深川へ被往つたのに、とんだことで御座いましたわね。」と、云つて、「さ、まあ、兎に角此方へいらしつて下さいまし。」と、云つて、彼女はそのまま華奢な柴折戸から二人を庭の方へ案内してゆく。

廣々とした芝庭をみると、松谷はどうしたのか急に、子供のやうに聲をあげて、

「や、こりやいゝ庭だ。實に無技巧で、ゆつたりしてゐていゝ。」と、頻りに感心しだす。照子の快活な態度が少からず彼の心を和けたものらしかつた。

照子はその顔をみて、

「まあ、こんゝ没風景な庭がお氣に入りましたの。ほゝゝゝゝゝゝ、さ、まあ、それではお上り

遊ばして下さいましたな。」と、云つて、庭に面した洋館のヴェラダンへ二人を招する。

その硝子扉を開けると、中はコンザアベトリー風にこしらへられた室であつた。そこには地味な布で張つた安樂椅子や腕椅子が置いてあつて、暗い調子の壁帷などもしつとりと落ちていた色調をみせてゐた。ごく地味ではあつたが、いかにも品のいゝ、金のかゝつた裝飾が施してあるのであつた。

松谷は頻りに四邊を眺めながら、

「いや、こいつは素敵だ。柴山さん、貴方の邸に比べると、含蓄のある點からいつて、此邸の方が數等上ですなあ。やつぱり福井博士の邸宅だけありますよ。こゝにある額の畫もいゝぢやないですか。」と、壁にかけた大きな暗い風景畫をみながらいふ。

光雄は軽い調子で、

「いや、その畫ですか。そりや博士が彼地から買つて來られたもので、秘藏の窟ですよ。たしか英國の畫家の筆だとかいふが、僕はそんな人は知らんね。」と、云ひ云ひ此方へ近寄つて來る。

松谷は飽かず畫面に見入りながら、

「こいつはいゝなあ。樹木の表情が恐ろしくペシミスティックで面白い。あゝ此りや柴山さんあなたなんか知らない人ですよ。ベルジウムのワイズマンですもの。ワイズマンとは又濫いのを買つたもんだなあ。此の人は一生樹と森ばかり描いてゐた畫家なんです。日本には名ばかり聞えてゐるつきりで、殆んど作品はないんだが、併し珍らしいものを見ましたなあ。こいつは有難い。」と、彼は躍るやうな格好をする。

光雄は噴き笑して、

「はゝゝゝゝゝ。松谷君、そんな滑稽けた格好をするのはよせよ。まあこゝへ来てかけ給へ。併しまあ、御機嫌の悪いのが癒つて何よりだ。一時は僕を殴りでもしさうな顔つきをして居つたからねえ。はゝゝゝゝゝ。」

松谷はそれには取り合はないやうに、知らん顔で、もう一枚の額の方へ足を運んでいつたが、今度はあんまり感心しなかつたとみえて、

「あゝ、上田敬太郎の羊か。こいつはいけない。僕には苦手なんだ。」と、獨語を云つて、ふつと、自分の描いた福井博士の肖像畫がそこに置いてあるのをみつけて、そこへ遠慮もなく踏みながら、じいつと眼を据ゑてそれを研究しはじめた。彼の眼は漸次と熱意に囚はれて、頻りに小鼻をひくひくさせながら、黙つて見てゐたが、少時すると、

「可けない。どうも可けない。どうして俺はかう拙いかなあ。」と、自分に鞭打つやうにいふ。

照子はその様をそれとなく見ながら笑つてゐたが、やがて、

「松谷さん、まあどうか紅茶でも召飲つて下さいまし。その畫はあとで御覽になればいゝぢや御座いませんか。」と、いふ。

それでも松谷はいきなりつかつか立つて、椅子のうへに置いた繪具箱を取つて来て、今度はその繪を光線の工合のいゝところへ持つていつて立てかけながら、もう一刻の間もじつとしてはゐられないといふやうな調子で、その畫に手を入れはじめた。彼は照子や光雄が何を云つても、知らん顔で一生懸命になつて仕事に没頭しだした。

そこへ突然扉が開いて、小間使が入つて來ながら、

「あのお嬢様、お客様かおみえになりまして御座いますが。」と、いふ。

照子は眉をひそめて、

「あら、お客様？ 誰方？ 今日には誰方にもお留守だつて申上げて呉れつて、あれほど頼んで置いたぢやないの。」と、云ふ。

小間使は氣の毒さうに、

「あの、さういふお云ひつけでは御座いましたんですけれど、あの、桑原様のお嬢様がおみえになりましたもんで御座いますから。」と、おづおづ云ふ。

それを聞くと、照子は思はず椅子から立ち上つて、

「まあ、民子様がおいでになつたの。それぢや仕方がないわ。どうか此方へお通し申してお呉れ。」と、急に又いそいそしながらいふ。

小間使は出ていつた。

光雄は一寸その會話を小耳に挿んで、

「照子さん、桑原さんですつて？」と、口を入れる。

照子はにこにこしながら合點いて、

「え、民子さんなんですわ。何んだつて又こんなにだしぬけに被來つたんでせう。あの方はいつも前に電話をかけて下さるのに。」と、云つて、椅子を程よいところへ直しながら、「でも丁度いゝところへ來て下さいましたわ。あの方なら、此處で皆さんと御一緒になつたつて構ひませんわねえ。」と、賢かしげに、眼をくるくるさせながらいふ。

光雄はもう一人若い女性が座に加はると聞いて、嬉れしさうににこにこしてゐた。

廊下の方ではやがてかすかな足音が聞えて來た。

## 九

民子は少時すると小間使に案内されながら扉を開けて入つて來た。彼女は今日はいつもと違

つて、馬鹿に派手な縞お召の着物に飛び模様の羽織を着て、その癖どうしたのか顔色はひどく勝れなかつたが、ひよつと室内へ入つてくると、先づ光雄の顔が眼に入つたので、彼女はさもどぎまぎしたやうにもう耳の附根から眞紅になつて、俯向いたまゝ、照子に口の中で挨拶をする。

照子は椅子から立つていつて、浮々した聲で、

「あら、民子様、よく被來つて下さいましたわねえ。まあ、此方へおかけ遊ばせよ。」と、云つて、怪訝さうに、「貴女、どう遊ばしたの？ いつもはきつと電話をかけて下さるのに、今日はあんまりだしぬけだつたんで、私、まさかと思ひましたわよ。」と、笑ひながらいふ。

民子はそのまゝ、妙にそぐはぬ態度で椅子に就いて、

「照子様、御免遊ばせよ。折角お客様のところへお邪魔をして、私、どうしませう。」と、打沈んだ聲で云つて、「あの、私、一寸貴女にお眼にかゝつて、是非御相談し度いことがあつたものですから、つい電話で伺はないで……」と、遠慮がましくいふ。

照子はその手を握りながら、

「あら、あなた、私、さういふつもりで申し上げたんぢやないわ。厭ですことねえ。」と、いつて民子の顔をみながら、ほんとに貴女どうか遊ばしたんぢやなくつて？ お顔色もよくないし、……」と、云ひかけるのを、民子は押へて、

「私、今日少し頭痛がするもんですから。」と、いつて、照子の耳へ口を寄せながら、「ねえ、照子様、後で私、すつかりお話ししますわ。」と、呟く。

照子も民子には初対面の松谷がゐる場所なので、そのまゝ民子に合點いてみせながら、今度は光雄の方へ、

「ねえ光雄さま。ちの、松谷さんのお仕事のお邪魔をしても可けませんから、私達は彼方の窓の方へまわりませうよ。さうしてあの、民子さんと三人で、何か面白いお話でも致さうぢや御座いませんか。」と、云ふ。

やがて三人は出窓のやうになつた窓際へいつて、その安樂椅子へ並んで腰を下ろした。そ

こへ小間使のお春が民子の紅茶や菓子を運んで来たので、彼女に小卓をこつちへ持つて來させ  
照子は一人で噪いで、何かと話しをし出した。

松谷は知らん顔で仕事に没頭してゐた。何の音も耳に入らないやうに彼は此方さへ見な  
かつた。

光雄はそつと菓子をつまみながら、民子の方へ笑顔を見せて、

「ねえ、桑原さん、貴女にはよくお眼にかゝりますねえ。いつも僕御挨拶をしようと思ふん  
ですが、貴女が態と知らん顔をして行つておしまひなさんで、困つてしまふんですよ。はゝゝ  
はゝ。」と、さも親しげに打融けた調子でいふ。

民子もやつと落着いたとみえ、艶めかしい嬌態をして、

「あら、私、さういふ譯ぢやないんで御座いますけれど、何んですか恥かしくつて。」と、いふ。

照子は笑ひながら、

「ほゝゝゝ。光雄様。あの民子様はいつもさう仰有つて被居いますのよ。光雄さまにお眼に

かゝる度に、何んだか恥しくつて、御挨拶も出來ないつて。ですから、此次から貴方の方から大  
膽に何か仰有つて上げりやいゝんですわ。さうすれば民子さんだつて却つて恥かしくは思召さ  
ないと思ひますわ。」と、抑揄ふやうにいふ。

光雄は一寸様子振つて、

「だつて照子さん、僕だつて往來で若い女の人に挨拶をするのは變ですよ。いくら圖々しくつ  
ても、やつぱりてれる場合が多いのですからなあ。はゝゝゝ。」と、云つて、照子と民子の顔を  
見比べながら、女に媚びるやうな眼で微笑んでゐる。

照子は急に笑ひ出して、

「ほゝゝゝ。光雄様でもやつぱりそんなことが御座いますの。可笑しう御座いますわねえ。」  
と、心から笑つて、「ねえ、貴方。でも民子様は、あの、貴方のことをいつもシャンだつて讚め  
て被居いますのよ。ですから貴方、せいぜい途中でお逢ひになつても、御挨拶を遊ばさない  
と民子様がお可哀想ですわ。ほゝゝゝ。」と、あけすけに、それでも極めて無邪氣な態度でい

民子はそれを云はれると、可笑しい程眞紅になつて、

「あら、照子さま、そんなことを……」と、云つて、手帛で色めかくし顔を掩つて、恥かしさうに傍を向いてしまふ。

光雄は少してれたやうな、それでゐて得意さうな顔で、まじまじしながら、

「はゝゝゝ。笑談云つちや可けませんよ。照子さんはほんとに人が悪いからねえ。」と、云つて、照子の顔をみながら、「併し、照子さん、今日は此間の時と違つて、大變に御機嫌ですわね。今日はメランコリーぢやないんですか。お父様のことは思ひ出さないんですか。」と、いふ。

照子は生々した目つきで、

「え、今日はもう朝から何んですか、嬉れしくつて仕様がないうんですの。何かかう大きな幸福でも落ちて來さうな氣がして、噪ぎ度くつて仕様がないうんで御座いますわ。私もほんとに馬鹿ですわねえ。」

「いや、馬鹿なことではないですよ。さういふ氣持のいゝ日にやつて來て、僕もいゝことをしました。此間のやうだと貴女は手がつけれられませんからねえ。はゝゝゝ。」

照子も眼を輝かして

「でも、光雄様。あの此間の晩のやうな、あんなことをなすつちや私厭で御座いますわ。お酒の上でせうけれど、私、何んだか恐くなつてしまつて、私、あれから何んだか貴方が嫌ひになつてしまひさうでしたわ。」と、まじろぎもしずに云ふ。

光雄は突如にそんなことを素破抜かれたので、さすがに困つたやうな笑ひ方をして、

「いや、此間の晩はほんとに失敬しましたね。酒のうへつていふんでもないんだけど、僕何んだかかう變な氣持ちになつてゐたんですもの。」と、辯解するやうにいふ。

照子は笑つて、

「變なお氣持ちつて、どんなお氣持ちなんですの？」と、光雄の顔を眞面に見詰めながらいふ。

光雄は眼を逸らして、

「さあ、それは一寸此處では説明し憎いすなあ。僕自身でも何んだかはつきり分らないやうな氣持ちなんですもの。」

「あら、光雄様、そんなにお遁げにならないだつていゝぢや御座いませんか。私、是非伺ひ度う御座いますわ。ねえ、光雄様。」と、照子はまるで子供が父の膝に甘えついてせがむやうな調子でいふ。

光雄は困つたやうな顔で、窓から外の曇り空を眺めてゐたが、やがて大膽な顔つきになつて笑ひながら、

「さあ、まあ、強ひて云へば、僕は仙んですかか取留めのない幸福を、自分のこの手でしつかりと握りしめたいやうな心持ちがしてゐたんです。もつと平つたく云へば、つまり今迄幻影になつて、僕の胸にちらついでゐたものを、現實のうへでしつかりと抱きしめたかつたんですねえ。僕はあの晩、貴女が歸つてから、随分煩悶しましたよ。」と、いふ。

照子は急に眞顔になつて、

「あら、貴方もそんなお心持ちにおなり遊ばすことがありませんか？ まあ、私もよくそんな氣になることがありますのよ。かう空想してゐることが、今眼の前で現實になつて呉れ、ばいと思ひましてねえ。」と、云つて、彼女は遠くをみるやうな眼つきをしながら、「私はそんな時にはふと悲しくなつて、もうじりじりしてしまひますのよ。」と、いふ。

民子もその時、やつと遠慮がましく口を入れて、

「ねえ、照子様、私もさうですわ。じいつとかうして考へてゐますと世の中のことがみんな思ふ儘にならなくなつて、もう減茶々々に壊してしまひ度いやうな心持ちになつてしまひますのさうなるともう私そりや悲しくなつて、人のみてゐない處へいつて、泣けるだけ泣くんですの。」と、云つて、悲しさうな眼色をしながら訴へるやうに照子の顔を見る。

照子も何か思ひ出したやうにしんみり眼を伏せてゐたが、やがてついと椅子から立ち上つて、



「あゝもうそんなこと何うだつてよう御座いますわ。それよりもつと面白いお話をいたしませうよ。幸福なんていふものはどうせ神様が分けて下さるんですから、私達は何んと思つたつて自由にはなりやしませんわ。ほゝゝゝゝ。」と、快濶に笑つて「あの、今日は折角皆さんが被來つて下さつたんですから、裏庭へいつてテニスでもするといふんですけれど、でも此處からは霜解けがひどいので、コートがまるで駄目なんです。何をしたらよろしいでせうね。ああ、それでは又ピアノでも弾きませうか。」と、いそいそしながらいふ。

その時、向ふでは松谷が仕事にひとくぎりついたのか、からりと畫筆を投げ捨て、此方へ立つて來た。

## 十

照子はそれをみると、又氣を變へて、松谷の方へ歩み寄つていきながら、  
「あら、松谷様。もう出來まして？」と、可愛らしく小首を傾げながら訊く。

松谷は澁い顔で、

「いや、何うもうまくいかないんです。今日は頭の調子が變で、どうやつてみてもうまい色が出て來ないんです。」と、氣むづかしさうに頭を振りながらいふ。

照子は笑つて、

「あら、それは可けませんわねえ。きつと何んで御座いませう。あの、折角貴方がお氣の向いたお仕事を遊ばして被居つたのを、光雄様が無理にこんな處へ連れておいで遊ばしたから、それで可けないんで御座いませう。ほんとにお氣の毒様で御座いますわねえ。」

松谷はその安樂椅子へいつてがくりと坐りながら煙草を取り出して火をつけて、

「いや……」と、云つたが、やがて照子の方をみて、「お嬢さん、あの、失禮ですが、お宅にはウキスキイはないでせうなあ。」と、無遠慮な調子で訊く。彼が美しい顔の持主であるだけに、さうした言葉がいかにもさつぱり聞えたのであつた。

照子は腹を抱へて笑つて、

「あら、宅にはお酒なんかありや致しませんわ。私と母とたつた二人きりなんで御座いますもの。」と、云つて、松谷の顔色をみながら、

「あの、でも、もし召飲るんならさう申してもよろしう御座いますわ。こんな田舎で御座いますから、ウキスキイなんかないかも知れませんが、日本のお酒なら御座いますわ。」と、笑談のやうにいふ。

そこへ、民子と二人で向ふの安樂椅子へ残された光雄がついと立つて来て、

「おい、松谷君、又酒かい。はゝゝゝ。今日はよし玉へ。この家は昔から全然酒を入れないう家庭なんだから、そんなことをすると僕が面目を失してしまふよ。はゝゝゝ。まあ、歸り迄我慢するさ。」と、何事か眼ませしながらいふ。

松谷はその顔をみもしずに、

「いや、それぢやお言葉に従はふ。そのかばり今日は仕事はこれで止めだ。ねえ、お嬢さん、その代り矢張りこの晝は僕のアトリエへ持つていつて、彼方で直して來ますよ。その方がいゝ

どうも知らない家へ來ると氣が落着かないで、どうも駄目だ。」と、又頭を振りながら安樂椅子から立つて、「ねえ、貴方、柴山さん、もう歸らうぢやありませんか。何んだかそこいらが薄暗くなつて來ましたぜ。雨でも降り出すと、可けないから、兎に角貴方のところの自動車で東京市内まで連れていつて呉れませんか。」と、笑ひもしずにいふ。

光雄は立つたまゝ、

「もう歸るのかい。酒がないからつて、直ぐに歸るのはあんまり現金すぎるねえ。はゝゝゝ、もう少し待ち玉へよ。」と、いふ。

それでも松谷はいこちな顔になつて、

「いや、僕は何んだか馬鹿に心寂しくなつて來たんです。晝がうまく描けない日にはいつもかうなんです。かういふ晩には、日本橋あたりの河岸にあるカツフェでもいつて、酒を飲むですなあ。さうすると又新しい感興がこの胸に湧いて來るんですよ。さあ、柴山さん、いきませう。」と、もうそろそろ晝具箱を形づけながらいふ。

とみると、曇つた空はいつもよりも早く暮れて、いつの間にかぱつと電燈が點つて來た。窓からみると、戸外は寒い風が吹き荒れてゐるとみえて、樹々の梢は時折さつと吹き撓められ、空には綿を千切つたやうな灰色の斷雲が妙に白ツ茶けた色をみせながら足早に南へ南へと流れていつた。

それをみると光雄は、ポケットから時計を取出してみながら、

「や、もう四時半だねえ。今日はゆつくり照子さんとお話しをする氣で出て來たんだが、松谷君の爲めに時間を取られてしまつたんで實に残念ですよ。もう四時半ぢや僕も歸らなけりやならない。今日は何處まで松谷君に祟られるか分らんねえ。」と、厭味のやうにいつて、照子の傍へ寄つていきながら、「それぢや照子さん、今日はもう此れで失敬します。そのかはり僕、今夜邸へ歸つて手紙を書きますよ。僕一寸貴女に相談し度いこともあるから。」と、他人には聞えなほどの小聲でいふ。

照子は微笑んで、

「あら、貴方、もうお歸り遊ばすの。そんなこといけませんわ。私、松谷さんは何んですけれど、今日は貴方が残つて下さると思つて實は母にもさう云つて、御一緒にお夕食を頂くやうに支度をさせて置きましたんですわ。ですから、貴方、およろしいぢや御座いませんか。」と歸し度くなさうにいふ。

光雄はさういはれると、さもさも歸り度くないやうであつたが、やがて又思ひ切つたやうに、

「いや、有難う。まあ夕食はこの次にお預けしませう。僕今日は歸りに弘田君のところへ一寸寄らなけりやなりませんから、どうかお母さまによろしく。」と、いふ。

照子はそれでも首を振つて、

「あら、貴方、それぢや随分ですわ。厭な光雄様ねえ。貴方、それぢや私よりも松谷さんの仰ることをお聞き遊ばすのねえ。それならよう御座いますわ。さ、お歸り遊ばせ。どうか御注意に。」と、妙にませた口つきでつんと拗ねるやうにいふ。

光雄は頭をかいて、

「どうもさう云はれちや困るなあ。ねえ、照子さん、いづれ手紙に詳しく書いて上げますから、今日は許して下さいな。そんな顔をしてゐちや僕どうしていゝか分りやしないぢやありませんか。ねえ、照子さん、今日はこれで失敬します。」と、當惑してゐるやうにいふ。

松谷はもう帆船の下畫と、福井博士の肖像とを重ねて、片手に提げながら、片手に繪具箱を抱へて、庭の方への出口のところへ突立つてゐる。彼はいらいらしたやうな眼つきで、急ぎ立てるやうに此方をみてゐた。

光雄は照子が黙つてゐるので、仕方がなしに民子の方へいつて、

「あの、桑原さん、貴女もしお歸りでしたら、僕の自動車にお乗りになりませんか。どうせ僕一度邸へ歸つて出直しますから、お宅まで送つていつてあげませう。」と、様子振つていふ。

民子は嬌態をして、

「あの、有難う御座いますけれど、………」と、云つて、照子の方をみる。

照子はその時、つかつかと二人の間へ割つて入りながら、

「光雄様、駄目で御座いますわ。民子様は私に御用があつて被來つたんですもの。それが済むまでは、私、お歸し申しや致しませんわ。ねえ、民子様。」と、いふ。その眼にはどうしたのかうすく涙が光つてゐた。

光雄はさう云はれると、稍てれて、

「それぢや仕方がないから僕、松谷君と二人で歸ります。照子さん、どうか氣を悪くしないで下さい。僕いづれ手紙を出しますから。」と、機嫌をとるやうに云つて、そのまゝ歸り支度をす

る。

松谷はもう扉を開けて、そゝくさ庭へ下りていつてしまつた。

光雄もすどすど下りていつたが、照子は民子の方へ、

「ねえ、民子様、一寸待つてゐらしつてね。」と、云つて、急に庭へ方へ下りていきながら、光雄の後に追ひ縋つて、

「ねえ、光雄様、ほんとに貴方随分ですことねえ。」と、まだ恨みがましくいふ。

光雄は態とそこへ立止つたが、四邊が暗いので、いきなりものも云はずに、照子の柔かい手をしつかりと握りしめる。照子はそれを振り拂はふともしずに、そのまゝ光雄の方へ體を寄せかけるやうにして歩いていつたが、柴折戸のところまで来ると、彼女はついと握られた手を振り切つて、

「光雄様、左様なら。」と、云つたきり、ばたばたともと来た方へ引返してしまふ。

光雄は呆氣にとられたやうに此方を見返つてゐたが、やがて、

「照子さん、それぢや左様なら、お母さまによろしく。」と、大きな聲でいつて、にたりと笑ひながら、柴折戸を出ていつた、そして小間使のお春に見送られて自動車に乗つたが、松谷はもう何時の間にか先へ乗つて、平氣な顔で口笛を吹いてゐた。

照子は應接間へ歸つて来ると、息を弾ませて、そのまゝ民子の傍へいつて腰をかけながら、「たうとう歸つておしまひなすつたわ。ほんとに光雄様は意地がお悪いのねえ。」と、いつたが、

民子も寂しさうな顔で、

「ほんとにもう少し被居ればようございますのにねえ。もう一人の方が可けないんですわ。あの方が歸る歸るつて仰有るから、光雄様までがお歸りになつてしまつたんですわ。」と、不平さうに云つて、「ねえ、照子様、あのもう一人の方は誰方？」と、訊く。

照子はうつとりしてゐるやうな顔で、

「あれは光雄様のお友達達の畫家ですの。」と、云つたつきり口を噤んでしまふ。

その時、大門の方では光雄達を乗せた自動車が警笛を鳴らしながら出てゆく物音が聞えて来た。

照子は茫然その音に聞入つてゐたが、やがてそれと引違えに、向ふの扉が開いて、誰れかど入つて来た。

扉を開けて、そつと入つて来たのは、照子の母親であつた。母親は民子がゐるのを見ると、につこり笑つて、

「まあ、民子様、貴女も被辱つてゐたんですか。それはまあよろこそ。」と、云つて、照子の方をみながら、「ねえ、照子、もう光雄さんはお歸りになつてしまつたんだつてねえ。何故あなたお止めしなかつたの？」と、いふ。

照子は不平さうに、

「母様、私、随分お止めしたんですけれど、光雄様は歸つておしまひなすつたんですの。なんでも歸りに何處かへお廻りになるとか仰有つてゐましたわ。」

「まあ、さうかい、それぢや仕様がな。それで、その畫家の方とかいふのも御一緒にお歸んなすつたのかい。」

「え、あの方はそりや變人なんですからねえ。今日も何んだか大變に御機嫌が悪くて、たうとう光雄様を引張つて歸つておしまひなすつたんですわ。ねえ、母様、それにあの、お父様の御

肖像もこゝでは直せないからつて、御自分の畫室に持つて歸つておしまひなすつたんですの。ほんとに可怪しな方ですわねえ。」

「まあ、さうでしたかい。」と、合點いて、母親は又扉の方へいきながら、「それぢや照子、折角夕餐のお支度をしたんだから、あの、失禮だけれど民子様に彼方へ被來つて頂かうぢやないかあんなからさう申上げて、お連れ申してお呉れな。」と、云つて、廊下の方へ出ていつてしまふ。

照子は光雄が歸つても民子がゐて呉れるので、夕餐の卓は無駄にはならないと思つたので、彼女に食堂の方へいかうとすゝめると、民子は遠慮して、

「私、いゝのよ。どうかお構ひなく。私、却つて困つてしまふんですから。」なぞと云つて、却却立たうとはしなかつたが、照子はそれを無理に強ひて、やがて民子の手をとつて食堂の方へ連れていつた。

そこで照子は民子と母親と三人でこの邸にしては賑やかな晩餐をとつた。何から何までみん

な邸でこしらへた手料理ではあつたが、それでも野菜ものなどは裏の畑に出来たものなので、新らしくて却つてうまかつた。

食事は三十分ばかりで終つてしまつた。

母親はその晩、亡父の三周忌のことで親類のものと打合はせをしなければならぬからといつて、食事がすむとすぐに自分の居間の方へ歸つていつてしまつたので、照子も民子を連れて今度は奥の自分の居間へいつた。そこで大火鉢に火を熾させて、熱い紅茶などを飲みながら二人はしんみり話し合つた。

照子は小間使のお春がいつてしまふと、さつきのことを思ひ出したやうに、民子の顔を見

て、  
「ねえ、民子様、貴女先刻私に話しがあるつて仰有いましたが、何んのことなんですの。もう誰れもありませんから、伺はして下さいませ。」と、いふ。

民子はさう云はれると、何うしたのか、急に双眼を濕ませて、

「照子様。」と、云つたが、そのまゝ涙聲になつて、「照子様、私、もう先刻からどうかして早くお話しし度いと思つてゐたんですけれど、皆さんが被居つたもんですから……。」と、云つて顔を伏せながら、

「あの、お話しし度いつていふのは、あの、別のことでもないんですけれど、私、實は今日父と喧嘩をしてしまひまして、そのまゝ家を出て來てしまひましたのよ。」と、涙ながらにいふ。

照子は吃驚して、

「まあ、そりや可けませんわねえ。何うしてそんな思ひ切つたことを遊ばしたの？ あゝ、分つた、此間お話しあの御縁談のことですらう？」と、いふ。

民子は情なさうに合點いて、

「え、さうなんですの。私、父があんまり横暴なんで、もう口惜しくなつてしまひましてねえ。」と、云つて、悲しげに涙を呑みながら、「あの、私、あれから、あの先方の方に一度お眼にかゝつたんですのよ。ねえ、照子様、私何から何まで打明けてお話しするんですから、どうか

貴女、そのつもりでお聞き遊ばして頂戴な。ところがねえ、先方の方つていふのが、お話に聞いてゐたよりも、そりやもつともつとシヤンでないのよ。襟のところから頬へかけて大きな火傷のあとがあつて、そのうへ頭の此方のところまで毛がないんですの。その代り大變にお身持ちの堅い、氣心のいゝ方なんださうですわ。それにそんな風ですから大學でももう一生懸命に勉強をなすつて、學科の方では大變に成績のいゝ方なんださうですの。でも私、いくら何んでも、それぢやあんまりだと思ひましてねえ。」

照子も思はず笑つて、

「あら、まあ、ぢや随分滑稽なのねえ。ほゝゝゝゝ」と、云つて、急に思ひ返しなから、「でも、そんなにお出来になる方ならお顔なんかどうだつていゝぢやありませんの。どんなシヤンな方だつて、火傷をなさりやさうなつてしまふんぢやありませんか。」

民子は不平さうに、

「でも、貴女はその方を御覧にならないから、さう思召すのよ。まあ兎に角一度お眼にかけ度

いわ。さうすりや貴女だつてきつと厭だつて仰有るわ。あれぢや私、一緒に歩いてゐてもきつと往來の人がみるだらうと思ひますの。もしそんな時には私までが恥かしくなつてしまひますもの。」と、云つて、又悲しさうに、「それにもう臺灣の方の口がきまつて、この十二月には彼地へいつておしまひになるんだつて云ひますし、彼地に三年ほどゐて、今度は歐羅巴へ又三年間留學なさるんださうですわ。彼地から歸つて被來りや無論すぐに博士におなりになるんだつて云ひますけど、私、いくら博士でも何んでも、あれぢやしみじみ厭だと思ひますわ。並大抵のことなら私、我慢しますけれど、でもじいつとみてゐると、ほんとに恐くなるやうなんですもの。あんな方とはとても一生一緒にゐられやしませんわ。」

照子も眞顔になつて、少時間を置いて、

「それで貴女、お父様は何んて仰有いますの。どうしてもその方の處へ嫁けつて仰有いますの？」と、云ふ。

民子は悲しさうに合點いて、



「え、さうなんですの。それも唯いけつてすゝめるだけならいゝんですけれど、もう命令的なんですもの。それに母の話では、もう先方へも大體の話は取極めたやうに返事をしてしまつたらしいんですわ。それが私口惜しくつて。」と、彼女はたうとうしく泣き出してしまふ。

照子も同情の深い眼つきになつて、

「まあ、そりや随分ですのねえ。貴女がそんなにお厭なものを、無理に押し付けておしまひになるのはあんまりですわねえ。そりやお父様の方がたしかに横暴ですわ。」と、いふ。

民子は手帛を出して顔を掩ひながら、

「私、今日そのことで父にさう申しましたの。私もしあんな方の處へ無理に嫁けつて被仰るんなら、私、死んでしまひますからよう御座いますつて、さう云ひましたの。と、父が云ひますのにはね、お前や俺の家の幸福のために俺が選定してやつた良人が氣に入らなければ、どうでも勝手にするがいゝ。死ねるなら死んでみるつて、かうなんですの。ですから私、もうほんとに口惜しくなつてしまひまして、そのまゝ着物を着換へて家を出て來てしまひましたの。ほん

とに私、もう死に度くなつてしまひましたわ。」と、云つて、頻りに嗚咽を呑みだす。

照子も貰ひ泣きをして、少時の間は黙つてゐたが、やがてどう云つていゝか分らなくなつて、

「ねえ、民子様。それでその先方の方はどう思つて被居るんですの。此間のお話のやうだと、静子様の方へもやつぱり口がかゝつてゐるんださうぢや御座いませんか。その方は何うなりましたの。」

民子は泣きながら、

「あの、静子様はあの方ならいゝつていふんで、却つて乗氣になつて被居るんださうですけれど、先方ではどうしても私をと仰有るんださうですわ。私、静子さまが被往つて下さるとほん

とに助かるんですけれど……」

「ぢや先方の方はやつぱり貴女に何にして被居るのねえ。考へてみればその方もお可哀想ですわねえ。」

二人はそのまゝ押黙つて泣いてゐたが、やがて民子はふいと顔をあげて、

「ねえ、照子様、貴方と柴山様の方は何うなりました？　もう大分お話が進んだんで御座いませう。」と、いふ。

照子はどうしたのか、その時、心にもなく眞紅になつて、

「あら、そんなことありやしませんわ。第一私、あの方からそんなお申込みさへ受けてゐやしないんですもの。」と、いふ。さうは云ひながら彼女は場合が場合なので、民子に對しては、何か物ありげにみせなければならぬやうな妙な氣持ちがしてゐた。

民子は熱心になつて、

「でも、貴女、お隠しになつたつて駄目ですわ。もうそんな噂がぼつぼつ聞えてゐるんですもの。」と、云つて、「貴女もしあの方から結婚をお申込まれになつたら、無論御承諾なさるんでせう。」

照子は微笑んで、

「さあ、どう致しませうねえ。私にはよく分りませんわ。私、淨い心持ちで私を愛して下さいさる

方なら、誰方でもいゝんですもの。」

民子は深い嘆息を吐いて、

「ほんとに貴女はお幸福ねえ。それだけの自由を持つて被居るだけでも、私、しみじみお羨ましく御座いますわ。」と、云つて、又泣き出しながら、「私、ほんとに何うしたらいいでせう。私、いつそ死んでしまはふかしら。」と、泣きながらいふ。

照子はそれを押へて、

「あら、民子様、そんなことを仰有つちやいけませんわ。」とは云つたが、彼女もどうしたのか、自分までが無上に悲しくなつて来て、そのまゝ涙を吞んでしまつた。

戸外ではいつの間にかとところどころに雲切れがして、蒼ざめた星の影がちらちらと隣き出してゐた。寒い風は益々吹き募つて来て、雑木林の方では遠波の音のやうなどよみが轟々と響いてゐる。と、みると、又雲脚は眞黒に亂れて、星影はみえてゐながら、俄かに寂しい寒雨がざあツと落として来た。

その晩、照子はいろいろに民子を慰めて何うにかして、彼女の心持ちを和げようと思つたが民子はさうなると、益々感傷的になつて、先々と興奮してゆくので、終にはさすがに照子もほとほと持て餘してしまつた。民子の心の中を思ふと、若い同士だけにいろんな同情も湧いてくるし、又一々共鳴するところもあつたが、併し照子から考へると、彼女がこのまゝ家出をしてしまふといふことは餘りに過激な手段であるやうに思へてならなかつた。さうまでにしなくても、何んとか父と折合ふ仕方もあるだらうと思つて、照子は頻りにその手段を考へ出したのであつた。

そのうちにもう午後の九時になつてしまつたので、照子はさぞ桑原の家で心配してゐるであらうと思つて、それが今度は氣懸でなくなつて來た。で、もう思案に餘つて、彼女は便所へ立つやうな振りをしてそつと母親の居間へいつて、民子が家出して來た顛末を手短かに打明

けて、何うしたらいいだらうかと相談してみた。と、母なるみな子未亡人もひどく驚いて、何よりも桑原の家で心配をしてゐるのが氣の毒だといつて、すぐさま自分で桑原へ電話をかけて民子の母に當る博士夫人に電話口へ出て貰つて、民子が此方へ來てゐることを傳へた。

桑原の家では民子が父博士と云争ひをして、そのまゝふいと家を出てしまつたきり餘り歸りが遅いので、もう上を下へかへして大騒ぎをしてゐる最中であつた。で、その報らせを聞とほつとして、ひどく嬉んで早速これから自動車で誰れかを迎ひにやるからとは云つたが、しかしみな子未亡人はそれを押へて、今の様子ではとても今夜は民子が歸りさうもないし、それに雨も激しく降つてゐるしするから、今夜はひと晩此方へお預りして、明日氣の鎮まつたところでお歸りするからと云つて、その晩は民子を福井邸へ泊めることに打合はせをした。先方の博士夫人はその親切を心から謝して、それでは明日自身でお禮旁々引取りに出向くから、どうかそれ迄よろしくそちらでお訓しを願ふと云つて、もう電話口で幾度か禮を云ひ續けてゐた。

その晩民子は照子の寢室になつてゐる居間の隣りの八疊で、照子と枕を並べて寢に就いた。

氷雨は小止みもなく降りしきつて、丁度眞夜中頃から雪にでもなつたのか寒気がひとときは鋭くなると一緒に、戸外では風の音ばかりが寂しく雨戸を鳴らしてゐた。民子と照子は眠られないまゝに、悲しいことばかり先々と語りつゞけては、涙に浸つてゐた。

その翌日になると、丁度午少し過ぎになつて、桑原からは博士夫人が自動車で民子を迎へて来た。昨夜降つた雪ももうその頃には霽れて、その日も寒い寒い北風がびゆうびゆう吹いてゐた。民子は表の應接室で、博士夫人やみな子未亡人から、散々云ひ聞かされて、やつと自分の云ひ分も通るやうになることになつたので、それから二時間ばかりの後に涙ながらに照子に別れを告げてしよんぼり博士夫人と一緒に歸つていつた。照子は玄關まで送つて出たが、手帛で顔を掩ひながら自動車に乗る民子の姿をみると彼女も何かしら泣かずにはゐられなかつた。

照子はそれから又自分の居間へ閉ぢ籠つて雪催ひの曇り空を眺めながら、氣の毒な友の身のうへを頻りに思ひ續けた。あゝは云つて歸つたものゝ、民子はもう到底父博士の意に背いて、今度の結婚を拒絶することは出来ないであらう。博士があゝの通り無理解な、我意の強い人であ

るだけに、民子は結局はどうしてもその犠牲になつてしまはなければならぬであらう。思ひも染めぬ人のところへ無理やりに嫁けられてしまふ人の心持はどんなであらう。一生の苦樂を借にしなければならぬ良人が、自分の嫌ひな嫌ひな人であつたら、その不幸は何れ程であらうそれを思ふと照子は自分までが息が塞まるやうに口惜しくなつて来た。そしてもし民子がさうなつたら、それこそ彼女の爲めに涙の限り泣いてやらうと思はずにはゐられないのであつた。照子は翻つて自分の身のうへを思ふと、彼女の心にも初めて結婚といふやうな問題がはつきりと映つて来た。彼女は漠然と夢のやうに考へてゐた事實が、現實の問題となつて胸に浮んで来ると、もう何も彼も唯厭で厭で耐らなかつた。それよりも自分はもうこのまゝ永遠の處女でゐたい。あの聖心女學院のマダム様のやうに、清い處女でゐて、短かい生命を神の御前に捧げることが出来たらどんなに嬉しいことであらう。今迄に結婚した同窓の人達や、近親の人達の身のうへを思ふと彼女は唯一途に結婚なんかするのが厭でならなかつた。さうした人達の間に起つた悲しい事實や、忌はしい事實ばかりが心に浮んで来て、彼女は先々と考へるとも

耐らなくなつてくるのであつた。淨らかな神の國の空想は又その時にも、彼女の心に限りもなく浮んでくるのであつた。

さうした思ひに沈んでゐるところへ、突然小間使のお春が一通の手紙を持つて入つて來た。彼女はそれをそつと照子の卓のうへへ載せて、

「お嬢様、あの、お手紙が参りましたして御座います。」と、いふ。

照子はその聲でふつと我れに歸つて、

「あら、まあ、さう。」と、云つて、その手紙のうへへ眼を落としたが、とみると、それは大型の西洋封筒で、丁度裏が引覆返してあつたので、その端に萬年筆で書いてある光雄の名前はつきりと眼に入つた。と、彼女は何うしたのか、自分でも不思議に思はれる位にさつと頬が熱くなつて來た。

照子はその手紙をそのままそこで封を切つてみるのが、何かしら恐いやうな、人に見られさうな氣がして耐らないので、そつと自分の懷へ押入れてしまつた。そしてお春が去つてしま

ふと、彼女は何處か人目のないところへいつてゆつくり讀み度いやうな氣がするので、やがて足音を忍びながら、廊下へ出て、その靴脱石のところへ揃へてある庭下駄をつツかけて、散歩にでも出るやうな顔で庭へ下りていつた。彼女はきつとその手紙の中に、何か重大なことが書いてあるに違ひないと思ふと、唯譯もなく胸が込み上げてきて、いくら押へようとしても動悸が靜まらないのであつた。

照子はやがて芝庭を突切つて、庭の隅にある樹立の陰の花壇の中へ入つていつた。そこは母家の方からは樹立に遮られてゐてまるで見えないうへに、滅多に人の來る場所でもないので、彼女はそこの中の枯れ朽ちた秋草の蔭へ蹲んで、四邊の氣勢を窺ひながら、少時すると、そつと光雄の手紙を懷から取出してみた。

照子は指の先でその封を切る時に又胸が騒いでならなかつた。昨日も光雄があゝ云つて歸つたのであるから、きつとこの中にはラブレターが入つてゐるに相違ないと思ふと、照子は嬉しいやうな、恐いやうな不思議な心持が胸一杯に溢れて來て、彼女は幾度か封を切らうとして

は躊躇した。

やつと思ひきつてびりびりと封筒を割いてみると、中からは同じ色の、少し厚めな西洋紙の書簡用箋が出て来た。それは案の定、書き出しからしていつもと違った手紙であつた。幾度か書き直した末にやつと書き上げたものらしく、細かい文字で一行一行克明に書いてあつたが、それでも四枚のうへもあつた。

「パピロンの野に咲く百合の花も……」なぞと若い處女心に媚びるやうな美しい文字が先々と書き聯ねてあるのをみると、照子はいつの間にか眼の先がぼうつとなつてしまつた。あの光雄にしては見懸けに依らない美しい文章が妙に彼女の心を動かして、彼女はそのまま夢みるやうな心持ちになつていつた。

「……照子さん、私は神に誓ひます、私はもう今となつては、貴女といふものゝ靈に依つてのみ救はれ、貴女の美しいお心の中に生の目的の全部を見出すより他はないのです。私はもう全く貴女といふものなしには生きることが出来ないのです。この寂しい冬の夜更に、私はかうや

つて自分の書齋で、吹き荒ぶ風の音や硝子窓を打つ雨の音を聞きながら、唯あなたの美しい幻影を見詰めてゐるばかりなのです。私は貴女が許してさへ下されば、明日にでも婚約をし度いのです。さうなつたら私はどんなに幸福でせう。私はその日のことを思ふと、ホルレンデルの「花の精」の曲を聞いてゐる時のやうな唆られるやうな歡喜を覺えます。星の輝く空に、私の永遠の道が開けてゆくやうな氣がします。照子さん、私はそれほどまでに緊張した心持で、貴女を戀してゐるのです。私の戀は遊戯ではありません。穢れた肉の戀でもありません。私は私の全生命の跳躍を欲する爲めに、貴女といふものゝ淨い靈と結び付き度いのです。ですからもし貴女が私のこの戀を許して下さらないとしたら、私はどうなるでせう。私はその時こそギロチンを眼の前に見るのです。悲しい絶望と恐ろしい死とを同時に宣告されるのです。私は決して怯懦な男ではありません。どうかそれだけは貴女のお心にとめて置いて下さい。」

「もうそろそろ夜が明けかゝつてきました。ほの白い曉の光が私の机のうへに流れはじめました。夜半から雨は雪に變つて、庭の樹立がうつすりと白くなつてゐます。今頃貴女は温い臥

床のなかで、どんなに幸福な夢路を辿つてゐられるでせう。もし神様が私を憐れんで下さつたら、私のこの思ひの萬分の一でも貴女の夢路に傳へて下さるであらうと、私は、そればかり心に祈つて居ます。照子さん、どうか私に貴女の名を無意味に呼ばせないで下さい。さうして私に再生の歡びにも似た楽しい光明を與へて下さい。……」

そこまで讀んで來ると照子はもう堪らなくなつて、いきなり、その手紙を燃えるやうな自分の頬に強く強く押當てながら、彼女は深い嘆息と一緒に、思はず、

「光雄様！」と、心の中で叫んだ。照子の眼にはその時、熱い涙が譯もなく滂沱として流れ出てくるのであつた。

### 十三

照子は光雄の手紙を見たその日から、まるで人間が變つたやうに、妙に陰鬱になつていつた。始終居間にばかり閉ぢ籠つて、双眼に一杯涙をためながら冬枯れた庭の面を眺めくらして

ゐるかと思ふと、又或時は可笑しいほど焦れに焦れて、小間使のお春までがさすがに持て餘すやうなことが度々あつた。みな子未亡人の眼にもその變りやうが分つてひよつとしたら、體の工合でも悪いのではないかと云つて、顔を合はせる度に未亡人は心配さうな顔で訊ねた。その都度、照子は唯首を振つて他の話に紛らかしてしまふのであつた。

照子は夜になると、毎夜のやうに光雄に對して返事を書かうと思つて、巻紙を取出しては文案を考へてみるが、併し扱て筆をとつてみると今の心持ちをどう書いていゝか分らなくて、徒らに心持が焦立つてくるばかりであつた。彼女はたつたひと晩で一本の巻紙を破つては捨て、破つては捨てしながら、無駄にしてしまふのであつた。

母に連れられて家へ歸つていつた民子のことも時々は氣に懸つたが、併し照子は十分間と民子のことを考へてゐる餘裕がないのであつた。もう彼女は他人の不幸や、苦悶を考へてゐるほど心持ちにゆとりがなくなつて唯一途に光雄のことばかり思ひつめてゐるのであつた。空想の郷國に現はれてくる天使の顔は光雄の顔になつて、ひたとそれを凝視してゐると、彼女の心は

耐らなく慄へてくるのであつた。大きな夢のやうな虹の環に取圍まれた幻の塔の中で、照子は唯光雄の幻影と楽しい、息塞まるやうな戀の歡樂にばかり浸つてゐた。それでゐて時々ふと眼が覺めたやうに我れに返る時、照子は自分は果たして光雄に戀をしてゐるであらうか、光雄の爲めには生命も要らないほど熱狂してゐるであらうかと心に問うてみると、彼女は我れながらその答へに窮するほど迷つてゐるのをはつきりと感じるのであつた。

空に瞬く美しい星影は、夜毎に彼女の心に妙なる伴奏を奏して呉れた。暗い樹立をどよもしてゆく風は、彼女の心にはるけき郷國の讚歌となつて響いて來た。彼女には或時は神の姿がはつきりとみえて、その尊い頬に浮ぶ微笑さへ眼にみえることがあるのであつた。

或晩のこと、照子は親戚の家の者に誘はれて、帝國劇場へ女優劇を觀に行つた。照子は何んだかさうした人込みへ出てゆくのが厭で、その日もどうかして断らうと思つてゐたが、みな子未亡人がせめてさういふところへ出たらいくらか氣も紛れるであらうから、と云つて、是非いけとすゝめるので、照子も到頭断りきれなくなつて、澁々支度をして邸を出たのであつた。

親戚の家といふのは四谷の信濃町にあるので、照子はそのままで省線の電車でいつて、そこちその家の若夫婦と一緒に自動車で帝劇へいつた。その日の出しものは一幕ものが主で、中には新作の所謂新しい芝居などもまじつてはゐたが、どれもこれもごたごたした筋のものばかりで、特に照子の興味を咬るやうなものは一つもなかつた。で、照子はボックスの座席へ入つてはみたものゝ、妙に氣乗りがしなくて、ともすると出ようとする欠伸を彼女は一心になつて噛み耐へてゐた。そして金碧燦爛たる天井を眺めながら、その晩も頻りに光雄のことばかり考へてゐた。さうした處へ來ると、彼女はいゝ手紙の文言が意地悪くひよいひよい浮んで來るやうな氣がして、今光雄への返事を書いたらと云ふやうな心持が絶えず胸を焦らだゝせるのであつた。

第三幕目が終つて、美しい場内の電燈が一齊にぱつと點ると、彼方此方の座席では煙草を吸ひに立つ人や、食事にゆく人達が俄かに眞黒になつて揉み合ひ出した。照子は親戚の夫婦に食事にかかないかとすゝめられたが、彼女は何んだか心持が悪くて、物を食べる慾望などは少し



も起らないので、氣の毒だとは思つたが體よく斷つて、そのまゝたつた一人で座席に残つた。そして場内に波打つてゐる觀客の出入りを眺めてゐた。

ひとわたり混雜が濟むと、今度は廊下の方が騒々しくなつて、觀客席の方は却つてひっそりとしてしまつた。座席に残つた客は三分の一にも足りない位になつて、舞臺を閉ざしてゐる美しい幕の模様が何んだか靜かな心持ちを四邊に流してゐる。座席に残つた人達は彼方でも此方でも顔を寄せ合つて、ひそひそばなしをしてゐるやうにみえた。

照子は何といふ氣もなしに、舞臺の端から後の方へ、座席の列を追つて順々にみていつた。と、その時、照子は丁度ほの側の二十三四位の處に、突如不思議な人の姿を發見した。そこは照子のボックスから随分距つてゐるやうに、その晩は非常な大入りだつたので、今迄は照子もまるでそつちをみもしなかつたのであつた。照子はふとその人影をみると、何うしたのか思はずはツと顔を紅めて、少し座席から伸び上つてそつちばかりみてゐた。

よくみると、その座席に並んで腰を下ろしてゐるのは、紛ふ方もない柴山の光雄と、桑原

の民子であつた。照子は一番最初に變だなと思つて瞳を据ゑた時から、ひよつとしたらと思つてゐたが、それが正しく二人であると知ると、もう胸は破れんばかりに躍つて來た。

光雄はいつものやうに大學の制服を着て、そのうへから短いオーバーを着て、その襟でなるべく顔の半分を隠すやうにしてゐた。民子は彼女一流の派手な好みで、今流行る分け髪に結つて、けばけばしい色のお召の着物に飛び模様の羽織を着てゐた。二人はびつたりと肩を寄せ合つて、何事か頻りに睦まじさうにさゝやきあつてゐる。しかも非常に四邊に氣を兼ねてゐるやうな、人目を忍んでゐるやうな風が自然とみえてゐた。

照子は眼を据ゑて二人の一舉一動を見通すまいとしてゐた。胸はいつまで経つてもどくどく激しく躍つて、ともすると傍にゐる人にも打つてゐる動悸が感じられやしまいかと思はれる程感亂してゐた。

照子にはいくら考へても、今頃彼等がたつた二人でこんな處へ來てゐる譯が分らなかつた。その近廻りをみても、知つた顔は一人もゐないので、どうしても彼等はたつた二人きりの伴れ

としか解釋することが出来なかつた。しかもあんなに打融けて、さも親しげに話してゐる様子が、照子には何うしても腑に落ちなかつた。二人は僅か三四度しか逢つてゐないのだし、それも大概自分が一緒の場合が多いので、さうまでに打明けた態度になれる道理がなかつた。殊に民子は先達の時とはまるで打つて變つた様子をしてゐる。時々甘えるやうに微笑みながら光雄の方をみる眼眸が、照子にはさながら別人のやうにみえたのであつた。

照子は何うしていゝか分らないので、そのまま黙つて、唯じつとそつちばかりみてゐた。今に何方かゞ此方を見たら、何ういふ挨拶をしたらいゝかと思つて、彼女はそればかり心配してゐた。殊に光雄には、あゝした手紙を貰つたあとではあるし、何かしら眞正面には彼の顔も見得ないやうな恥かしさを覚えるのであつた。併し幸ひにして二人はなかなか此方を振向きさへしないので、照子はおどおどしながらもいくらか氣が静まつてゆくのであつた。

さうしてゐるうちに、次の幕が開いたので、座席は何處も彼も眞暗になつてしまつた。さうなると照子はもうとても舞臺などをみてゐる氣がしないで、暗くなつたのを幸ひに、今度はま

るで夢中になつて二人の方ばかりみてゐた。そこからみると、脚光の反映で、さつき明るかつた時よりも一層よく二人の舉動がみえる。二人は影繪のやうになつて観客の頭と頭との間から姿をみせてゐたが、向ふも暗くなつた故か、さつきよりも一層體を寄せ合つてゐるやうにみえた。時々は頬と頬とが觸れ合ふのではあるまいかと思はれるほど二人は肩を近づけてゐた。照子は漸次と驚きが靜まると一緒に、今度は不思議な感情が火のやうになつて燃え上つて來た。あゝした民子のことであるからひよつとしたら光雄と、思ふと、彼女は唯無上に氣が焦立つて來て、何の譯もないのに矢鱈と口惜しくなつて來た。それは嫉妬であると説明すれば説明出來ないことはないやうな變な感情であつた。彼女の眼にはやがて涙さへ浮んでくるのであつた。

舞臺の方では美しい幻影のやうに、澤山の女優達が眼も綾な色彩を亂して何かを演じてゐるが、併しそれは照子の眼には一つも映らないのであつた。

照子は向ふから見付けられないのを幸ひにそれから第五幕までは自分の方でも態と隠れてゐたが、その幕間になると、光雄は何をするのか急に座席から立ち上つて、出口の方へ出ようとした。その途端に彼の視線は計らずも此方へ注がれて、彼は吃驚したやうな一瞥を照子の方へ投げた。照子もはつとして、何か悪い事でもしたやうに、思はず親戚の夫人の影へ顔を隠した。光雄も照子が来てゐることを確めると、少時の間はさも所置に困つたやうにぼんやり此方ばかりみながらそこへ立つてゐたが、やがて民子にも照子の來てゐるのを知らせるのか、彼女の方へ顔を寄せる。と、民子も困つたやうな顔で、此方を振顧つた。その咄嗟、一寸三人の間には妙なものが出來上つて、挨拶をすることも、何も出來ないやうな變な風になつてしまつた。やがて少時たつと、光雄は又何か民子に耳打ちをして、そのまゝ此方へ眼配せしながら大股に廊下の方へ出ていつた。民子は衣紋をつくるつたり何かしたあとで、澁々そのあとに續いた。

た。彼女はそれでも此方を見て、につこりと笑つたりした。

照子もさうなると、黙つて座席にゐる譯にもいかなかつた。で自分も立つて廊下へ出ようとする、連れの夫人はその顔を見て、

「あら、照子さん、何處へ被往るの？」と、いふ。

照子は隠さなくてもいゝのに、態と合羞んだ様子で、

「あの、私、一寸便所へいつて参りますわ。」と、いつて、それなり廊下へ出て、ぶらぶら正面玄關の方へ歩いていつた。

玄關のホールまでくると、丁度向ふからは光雄と民子が互に前後しながら急ぎ足に此方へやつて來るのに、ぱつたり出會はした。

光雄は少し頬を紅めながら、妙にてれたやうな顔で笑つて、

「やあ、照子さん、貴女も來てゐたんですか。」と、いふ。その調子は無關心な快活を裝つてゐながら、何處かに氣を兼ねてゐるやうな不安な心持ちをみせてゐた。

照子は頭からさう云はれると、自分も口だけで笑つて、耳の附根から眞紅になりながら、「先達は。」と、口籠つて、あとは辭儀に紛らかしてしまふ。

そこへ民子もせかせか歩み寄つて来て、

「まあ、照子さま。貴女も被來つてゐたんですの？ ほんとに思ひ懸けない處でお眼にかゝりましたわねえ。ずつと初めから御覽になつてゐましたの？」と、襟巻きで口を隠しながらいふ。彼女は可笑しいほど厚化粧をして、ひどくどぎまぎしてゐるやうに落着かない風をみせてゐた。

照子も少し顔を上げて、

「え、今日は信濃町の安達に誘はれて來まして、二幕目からみましましたの。」と、小聲で遠慮がましく答へる。

光雄はそれを引取つて、

「やあ、二幕目からみてゐたんですか。そりや驚いたなあ。何うして今迄見附からなかつたら

う。貴女も僕等が來てゐることが分らなかつたんですか？」

照子はやさしく合點いて、

「え、私もちつとも知りませんで、今光雄様がお立ち遊ばしたんで、初めて知つたんですわ。」と、いふ。

民子はちらりと光雄と眼を見合はせて、

「まあ、さうで御座いましたか。でもほんとにお眼にかゝれてよう御座いましたわね。」と云つて、急に調子をかへながら、光雄の方をみて、「ねえ、貴方、今夜は随分不思議な晩で御座いますことねえ。貴方に先づ第一にお眼にかゝつて、その次に照子様にお眼にかゝるなんて随分不思議ぢや御座いませんか。前からちやんと仕組んで置いたやうで、可笑しう御座んすわねえ。ほゝゝゝゝ。」さういふ顔は此間の時とまるで違つて、いくら隠さうとしても嬉れしさうな微笑みが包みきれないのであつた。

光雄は稍落着いて來て、媚びるやうに照子の顔をみながら、

「ねえ、照子さん、ほんとに今夜は變ですわねえ。いつも芝居なんかへはあんまり出懸けない貴女が、ひよつこり見えるなんて實際妙ぢやありませんか。僕は又僕で實に可笑しいんですよ。實は今日元園町の伯母がこゝの切符を買ひましてねえ。僕の母も誘つて二人で来るつもりでゐたんですが、丁度生憎今夜は鍋島さんの御法事へ打衝かつてしまつたんで、二人とも来る事が出来なくなつてしまつたんですよ。で、僕に切符が無駄になるから是非いけといふんで、仕方なしにやつて来たんですが、さうすると不思議ぢやありませんか、僕の座席のすぐ前に民子さんがゐるんです。僕吃驚しちまひましてねえ。」と、辯解するやうにいふ。

民子はそのあとを引取つて、

「ねえ、照子様、私は又私で、今日はやつぱり思ひがけなく此處へ参りましたんですわ。いつもお話するあの方ねえ。あの方が是非来いつて仰有るんで、實はもうそれこそ死ぬ思ひで厭参りましたんですわ。ところがいゝ鹽梅に、あの方は三幕目があくど直ぐに急な用がお出来になつて、お宅から電話がかゝつて来ましたんで、そのまゝ歸つておしまひなすつたんですの。」

だもんですから、私、一人でみてゐるのもつまらないと思つて、光雄様に来て頂いたんですの。」と、これも又辯解がましく云ふ。

照子は何う云はれても、何にかしら二人の言葉を信じてゐることが出来なかつた。二人は互ひに打合はせでもして、劇場で落合つたやうに思はれて、彼女はさうなつてみると、不思議な嫉妬が胸の中で沸き返つて来るのであつた。彼女は態と口には微笑みを浮べながら、何食はぬ顔で、

「まあ、さうで御座いましたか。ほんとに妙ですことねえ。」と、云つて、あらぬ方をみてゐた。

民子は少時すると、今度は照子の方へ寄つて来て、彼女と並んで立ちながら、聲を落としたりして、

「ねえ、貴女、先日は又飛んだ御心配をかけまして、ほんとにお詫びの致しやうもありませんわ。あれから一度お手紙を差上げようと思つてゐたんですけれど、つひいろいろ取紛れてゐて

申譯も御座いません。」と、云つて、さも悲しさに、「ねえ、あなた、私たうとう極つてしまひましたのよ。私ほんとに何うしようかと思ひましてねえ。」と、嘯くやうにいふ。

照子もそれを聞くと、つひ引込まれて、

「まあ、ぢや貴女、たうとうお父様に負けておしまひなすつたのねえ。でもよく考へてみると、それもよう御座んすわねえ。」と、云ふ。照子は民子がその醫學士と結婚すると聞いて、急に何んだかほつとしたやうな氣になつたのであつた。

民子はさういふ照子の顔を恨めしさうにみて、

「あら、貴女、随分ですわねえ。ちつともいゝことなんかありやしませんわ。私もうほんとに自分の墓を築くやうな心持ちで結婚するんですわ。ほんとに私位不幸なものはありませんわねえ。」と、云つて、廊下の面へ眼を落す。その眼には涙がうすく輝いて來た。

光雄はその話を傍からそつと聞いてゐたが、その時、おせつかいに口を出して、

「いや、民子さん。そんなことはありませんよ。今の加藤さんは見たところでは恐い顔はして

被居るが、氣心のいゝ方のやうぢやありませんか。僕は二人で仲よく話して被居るのをみて、實は羨望に耐へなかつたんですよ。それに加藤さんがあんまり親切になさるんで僕は後で見えて居て、終には氣持ちが變になつて來ましたよ。こんなのが當てられたといふんでせうなあ。ははゝゝ。」と、冗談をいふ。

民子は頬を染めて、

「あら、随分な、私、それこそ死ぬ思ひで、やつとあれだけにしてゐたんですわ。それに、それに當てられたなんて、私、あんまりで御座いますわ。光雄様、私そんなことを仰有ると、ほんとに怒りますわよ。」と、睨むやうな眼つきをする。

光雄は猶も冷評すやうに、

「いや、貴女はさう云ふけれど、併し加藤さんの方ぢやそれこそもう貴女の勸心を買はふと思つて、失禮だが一生懸命になつてゐられるやうでしたねえ。僕はほんとに可笑しくつて、はゝゝは。」と、云つて、照子の方をみながら、「ねえ、照子さん、民子さんは兎に角幸福ですよ。その

中指にはめてゐるダイヤモンドの指環は、加藤醫學士の贈物なんですつて。そりや實に見事な石ですよ。」と、云ふ。

とみると、民子は成る程右の手の中指に今迄見馴れないすばらしい白金臺の指環をはめてゐた。ダイヤモンドはきらきら輝いてひと眼みても高價なものであることが分つた。

民子は照子がじつと眼を据ゑて彼女の手をみようとすると、嬌態をしながらその手を袂の陰へ隠して、

「あら、照子様、いやですわ。そんなに御覧になつちや。」と、云つたが、少時するとその手をついと今度は照子の方へ出して、「ねえ、貴女、あの方はお金なんかさう自由になりもしない癖に、どうかして私の氣を惹かうと思つて、こんなものを持つて来て下さいましたのよ。これでも千圓ばかりの石なんですつて。」と、眉を擧めながら厭さうにいふ。その實、彼女は内心では得意で、かうした物質の空華によつて惑はされてゐるやうな氣振がみえてゐた。

照子には光雄や民子のさうしたものゝ云ひ方が、何處か下品にみえて、耐らなく厭であつ

た。彼女はその晩は光雄に對しても、民子に對しても何んとも云へない幻滅の感じを覚えて、殊に光雄が酒蛙々々した顔をしてゐるのを見ると、彼女はまるで偽かれてゐたやうな呆氣ない氣がして、激しい失望が却つて彼女の胸を暗くしてしまつたのであつた。

最後の幕はやがて開いた。光雄は彼方に座席が空いてゐるから是非來ないかと云つたが、照子はそれを斷つて、二人に別れて自席へ歸つて行つた。

劇場が閉ねると、光雄と民子はもう出口に待ち構へてゐて、光雄の邸の自動車を迎ひに來てゐるから、是非照子にも一緒に乗れといつた。光雄は彼女を柏木まで送つてゆくといつてどうしても承知をしないので、照子ももう斷りきれなくなつて、親戚の夫婦にそのことを話して、やがて民子と一緒に光雄の邸の自動車へ乗つた。

自動車が駛り出すと一緒に窓の硝子には何か水沫のやうなものがほつりほつり降りかゝつて來た。ふつと氣づいて、覗いて見ると、暗い電車路にはいつから降り出したのか大粒の雪が目にもしるく、風に追はれながらさかんに降りしきつてゐた。

光雄はそれをみると、驚いて、

「やあ、雪が降つてゐますね。」と、云つたが、そのまゝポケットから時計を出して見て、「お、まだ十時少し過ぎたばかりだ。」と、呟いて、何か下心がありさうな眼つきになつていつた。

## 十五

自動車が櫻田門の附近まで来懸ると、光雄はやつと元氣を奮ひ起こして、照子の方を見ながら、

「ねえ、照子さん、十時ならまだ早いから、これから銀座へ出て、彼處いらのカツフエで何か體の溜まるやうなものを一杯飲んで歸らうぢやありませんか。戸外はあんなに雪が降つてるんですもの。このまゝ柏木まで風に吹かれて行つちやそれこそ凍え死んでしまひますよ。はゝゝは。」と、笑ひながら誘ひかける。

照子は浮かない顔で、厭さうに首を振りながら、

「私、折角ですけれど、失禮し度う御座いますわ。あんまり遅くなりますと、母が又心配致しますし、……………」

「はゝゝゝゝゝゝ。照子さん。僕と一緒にですもの。何んでお母さんが心配なんぞなさるもんですか、それに遅いつたつて、まだ十時ぢやありませんか。邸の自動車で飛ばしや二十五六分で貴女の家までいつてしまひますよ。さうすりや少くともまだ一時間位はカツフエで遊んでいけるんですもの。さうしませうよ。劇場がへりにカツフエや料理店へ寄るのは當然の話ぢやありませんか。このまゝ家へ歸つてしまふのは、西洋人に云はせると野暮の骨頂ですよ。はゝゝはゝ。」

それでも照子は悲しさうな眼でひとつ處ばかり見詰めながら、

「でも、私、そんな、賑やかなところへ參るのは厭ですわ。」と、いふ。彼女には光雄のうはうはしてゐるのが、その晩は氣障にさへみえて、耐らなく厭なのであつた。

傍でその様をみてゐた民子は、いくらか自烈ツ度さうに、



「照子様、およろしいぢやありませんの。光雄様があんなに御親切に仰有つて下さるんですもの。それをお断わりしちや失禮ですわ。」と、云つて、取做すやうに、「ねえ、貴女、一寸でもお伴しませうよ。さうして熱い珈琲でも御馳走になつて、それから歸りや光雄様だつてお氣が済むだらうと思ひますわ。ねえ、照子様、さうなさいましょ。」と、いふ。

照子はもう涙ぐまばかりな顔になつて、黙つてゐたが、そのうちに光雄は車の前硝子を開けて、運轉手に、

「おい、これから銀座のカツフェ・フランセエへ廻つて呉れ。お前知つてゐるだらう。一昨日の晚いつた彼處の家だ。」と、いふ。

運轉手は黙つて合點いて、やがて眞暗な濠端の道でぐるりと大廻りに車を廻はして、今度は銀座の方へ向つて疾驅してゆく。車が廻るときに、光雄は態とよろめくやうに照子の膝へ手を突いて、

「やあ、失禮。」と、云つて、その顔を覗き込むやうにしながら、「照子さん、怒つてゐるの？」

そんな恐い顔をしちや僕厭ですよ。何にもそんなに考へ込まなくたつていゝぢやありませんか。はゝゝゝ。」と、機嫌をとるやうに笑ふ。

民子もそつと照子の手をうへから握つて、「ほんとに照子様。私お怒り遊ばしちや厭ですわ。他の方なら何んですけれど、光雄様ぢやありませんか。どうせ送つて下さるつて、仰有るんですもの、もしお母様が御心配なさるやうでしたら、行つた先からお宅へお電話をお懸けになりやいゝぢや御座いませんか。」と、いふ。

照子はそれでも何んとも云はなかつた。唯何にかに深い絶望を覚えてゐるやうに、まじろぎもしずにじいつとひとつ處ばかり凝視しながら、唇を眞一文字にきつと引結んでゐた。

そんなことを云つてゐるうちに、自動車はもう數寄屋橋を出て、細い銀座の裏町を右へ折れていつたが、やがて明るい軒燈に照らされたカツフェ・フランセエの前へ來てびたりと停つた。

と、光雄は先づ先に自分で扉を開けて、ついと街路の方へ開いたカツフェの入口の石敷きの

處へ飛び下りたが、民子の方をみて、

「ねえ、民子さん。どうか照子さんを誘つて下りて来て下さいな。僕先へ入つて、卓子をとつて置きますから。」と、云つて、その大きな扉を腕で開けてカツフェの中へ入つてゆく。

民子は何うしても下りないといふ照子をやつて宥めて、兎にも角にも自動車を下りてカツフェへ入つていつた。中は丸い受笠で包まれた電燈が幾つも點つた廣いホールになつてゐて、彼方此方の卓子には三々五々客の姿がみえてゐた。そこはどつちかといふと有りふれたカツフェとは様子が違つて、外國歸りの人々や、美術家といつたやうな人が主な客なので、裝飾なども何處か洗煉された趣味を示してゐた。

民子が照子の手を執つて入つてゆくと、向ふの隅の卓から光雄がついと立ち上つて、此方此方といふやうに手で招く。民子は、照子を先に立て、それでもいくらか恥かしさうにそつちへ入つていつた。

とみると、その卓子には、光雄ばかりと思ひの他、畫家の松谷隆もゐた。光雄はさも愉快

さうに、民子と照子の方をみて、

「やあ、照子さん、たうとう自動車を下りましたねえ。萬歳、萬歳。」と子供のやうに云つて、

「ねえ、照子さん、今茲へ入つて來ると、いきなり松谷君に踏捕まつちやつたんですよ。この人はもうこのカツフェの主みたやうなもので、晩になるときつとこへやつて來ちや飲んでゐるんですよ。」

民子も照子も松谷が挨拶をしたので、丁寧に辭儀をしてすゝめられるがまゝに、二人並んでその椅子へ腰を下ろした。光雄は傍へ來て立つてゐる女給仕に、熱い紅茶を二つ命じて、

「それから、僕にはその松谷君の飲んでゐるウイスキーを一杯呉れないか。」といふ。

松谷はその様子を笑ひながらみてゐたが、何うしたのか照子から眼を離さずに、いきなり、「お嬢さん。先日は大變に失禮しました。僕が柴山さんを連れて歸つたといつて後で大變に叱られたさうですが、ほんとに濟みませんでした。」と、云つて、頭を掻きながら、「どうもあれからお預りして來たお父さまの肖像をいろいろにやつて見たんですが、どうもうまくいかないので

困つてゐるのですよ。貴女をみてからといふものは、何うも貴女のそのコンプレクシオンが、始終眼の中に残つてゐるんで、その爲めに却つて邪魔をされて、此間のやつを散々いぢくり壊してしまつた形があるんですよ。ですから、僕はいつそお父様の方は勘辨して貰つて、貴女を描かして頂いて、それで謝まつてしまはふかと思つてゐるんです。」と、いふ。さういふ彼は可成酔つてゐるらしかつた。

照子は自分に話しかけられてゐるのは知つてゐながら、黙つて俯向いてゐた。と、光雄はそれへ口を出して、

「いや、松谷君。今夜は照子さんは機嫌が悪いんだよ。帝劇からずつと家へ歸るといふのを、無理にカツフエへ連れて來てしまつたんで、僕が恨まれてゐるんだ。ねえ、民子さん。」と、民子の方をみながらいふ。

民子は艶めかしい嬌態をしながら、満面に媚びるやうな笑みを湛へて、合點いてみせる。松谷は笑ひもしずに、

「さうですか。お嬢さんは御機嫌が悪いんですか。」と、云つて、自分もふと眞顔になりながら「いや、柴山さん。そりや貴方が悪いんです。若い女の人の心持ちに背くといふことはたしかによくないことですよ。それにかういふ場所に馴れてゐない純潔な令嬢を誘惑するのは、非常に可かんことだ。柴山さん。貴方はさういふ點では随分無考へな眞似をするんですねえ。僕はいつもさういふことでは貴方に對して不満を持つてゐるんですよ。」といふ。

光雄は稍てれたが、すぐに氣を取直して、大きく笑ひながら、

「はゝゝゝゝ。又松谷君のお得意の純潔論が出さうになつて來たねえ。いゝ。分つたよ。まあ、それはそれとして、一杯飲むさ、今夜は僕が御馳走するから。」と、云つて、折柄女給仕がもつて來たウキスキイの壺を自分で取つて、松谷に酌をしようとする。

と、松谷は何うしたのか、それを手で抑へて、

「いや、柴山さん。今日は御馳走にはなりませんよ。僕は昨日畫が一枚賣れたんで、この通り二三日飲むだけの金はあるんです。」と、云つて、さも楽しさうに洋袴の隱囊へ手を突込んでち

やらちやらやりながら、「それよりもまあ貴方お飲みなさい。酒精に對して初心な貴方には、先づキング・ジョーシ位な處が丁度いゝでせう。」と、不遠慮な口をきいて、光雄に酌をしてやる。

光雄は苦笑ひをしながら一杯注がせて、今度はその壺をとつて、民子に、

「ねえ、民子さん。その紅茶の中へ少し混ぜて飲むといゝですよ。體が温まつてねえ。」といふ。

民子はにっこりして、

「ほんとにねえ。私少し頂きますわ。あんまり頂いて酔ふと醜態ですから。」と、云つて、自分で紅茶の茶碗を光雄の方へ出して注がせる。

光雄はそれへ注ぐと、照子の方を向いて、「ねえ。照子さん。貴女も少しお飲みなさいよ。此れから歸る途中で風邪でもひくと、それこそ僕が申譯がありませんから、ほんの少し飲んだら何うです。」と、云つて、黙つて注がうとする。

松谷はそれを横合から押へて、

「柴山さん。お嬢さん達にウキスキイをすゝめちや可かんでせう。僕がいゝリキウルを命じますから、それを上げて下さい。」と、云つて、彼は女給仕を呼んだ。

照子はその時、ふつと眼を上げて松谷の方へ一瞥を投げたが、その瞳には何うしたのか、やさしい光が輝いてゐた。

松谷も思はずその眼を見返した。

## 十六

女給仕はやがて松谷に命ぜられたリキウルを、小さな華奢な洋盃に注いで、銀盆にのせて持つて來た。それは眞紅に近い美しい色をした酒で、甘いアルモンズの匂ひがしてゐた。

松谷はその色を愛するやうにじいつと傍から覗いてゐたが、やがて満面に微笑を含んで、「ねえ、お嬢さん、これならお飲みになつてもいゝですよ。この酒は佛蘭西では貴婦人の飲む

酒で決して酔ふといふほど酔ひませんから。」と、いふ。

照子は唯頭を下けたばかりで、洋盃を取らうとはしなかつた。

民子はその酒の方は見向きもしずに、ウキスキイを入れた紅茶の方ばかり飲んでゐたが、やがて光雄の方を向いて、又媚びるやうに笑ひながら、

「ねえ、光雄様。私、父がお酒が好きだもんで御座いますから、私もいくらかその血筋をひいて居りますとみえまして、かういふ強いお酒を頂いても、割合に何んとも御座いませぬのよ。」と、いふ。

光雄は、それでも照子の方ばかり偷みみながら、

「さうですか。まあ、女の人も少し位なら酒精を用ひたつて、僕はいゝと思ひますよ。」と、いつて、民子の方を向きながら、「お父さまは随分飲るんですか？」と、いふ。

民子は又紅茶の茶碗を口へ持つていきながら、

「え、父はそりや飲みますのよ。もとは日本酒ばかりで御座いましたけれど、先年糖尿を病ひ

ましてからは、ウキスキイばかり飲むやうになりましたの。ずつと若い時分には、まるで飲まなかつたんださうですけど、歐羅巴へ参りましたから、酒精生活の味を知つたなんて、よく酔ふとさう申しますの。」

「はあ、ぢややつぱりあなたのお父様も洋行が祟つたんですねえ。そんな風ならきつと彼地の御生活は可成り華やかだつたんでせうなあ。日本と違つて、酒の生活と、つまり何んていふか、遊びの生活とは非常に密接な關係をもつてゐるらしいから、ひよつとかしたら、若きアンネツトなんていふお安くない思出がおあんなさるんぢやないんですか。はゝゝゝゝゝ。」彼の笑聲にはもう浮々とした酔ひが響いてゐた。

民子もぼうつとした色つほい眼つきになつて、

「ほゝゝゝゝ。きつとさうなんで御座いませうよ。父の書齋に置いてあります寫眞帖をみますと、色の褪めたやうな彼地の若い女の寫眞が二枚も三枚もありますんですもの。父に聞きますと、彼地でお世話になつた大學教授の奥さんやお嬢さんだなんて申しますんですけど、でも

それにしちや風が變ですし、それに第一さういふ方から紀念に頂いたものなら署名のしてある處をインキで塗り消してある譯が御座いませぬものねえ。ほゝゝゝゝ。」

「はゝゝゝゝ。いや、全くですよ。お父様もとんだ處で尻尾をお出しになつたもんだ。貴女にそこまで看破されてゐちや、もう睨みが利きませぬねえ。はゝゝゝゝ。」光雄はさも面白さうに笑ふ。

民子もその話が彼の氣に入つたのを喜ぶやうに、

「でも、父は駄目なんですわ。若い時分にはそんなことをしてゐながら、あの年になりますとやつぱり在來りの道徳家になつてしまひますのねえ。此頃ぢや妙に頑固なことばかり云ひまして、私、お小言を頂戴する度に腹が立つんで御座いますわ。今度の結婚のことなんぞでもそりや随分變な考へをもつてゐまして、それから割り出して來て、私にがみがみ申すんですもの、いかに私が讓歩しようと思つてゐましても、つい意地になつてしまひますんですわ。全く男の方は年をお取りになると利己的におなりになりますのねえ。」

光雄は笑つて、

「いや、そりや女だつて同じことですよ。貴女だつて、これで加藤さんと結婚して、一年も経つて御覽なさい。きつと妙な主我的な道徳家になつてしまひますよ。殊にお子さんでも出來りや、もうそれで貴女の若い生命は最後の幕を閉ぢてしまひませぬね。はゝゝゝゝ。」

民子は恨むやうな眼つきになつて、

「あら、光雄様。随分なことを仰有いますのねえ。私、そんなに早く老い込んでしまやあ致しませんわ。私子供なんか生むの大嫌ひですわ。私、もしそんなことになつたら、それこそ自殺でも何んでもしてしまひますわ。いつまでも若くてゐられゝばこそ、私、この世の中へ生きて來た甲斐があると思ひますわ。」と云つて、何處かに焦だゝしいやうな色をみせながら、「それに私、良人に對して少しでも不満があつてなら、そんな、子供なんぞ出來やしないとと思ひますわ。」と、光雄の顔を見入りながらいふ。

光雄はそれを笑つて、

「はゝゝゝ。駄目ですよ。貴女のやうに肉體の發達してゐる人はすぐにお子さんが出來ますよ。これこの通り、肩の肉でも何んでもふりふりしてゐるんですもの。」と、云つて、彼は笑談のやうに、民子の肩へ手をかける。

民子も亦笑談のやうに、態とその手を振り外さうともしずに、肉感的に笑つて、

「ほゝゝゝ。さうしたらよう御座いますわ。私、サンガー夫人のお弟子になりますわ。」と、いつて、又紅茶の茶碗をとりあげる。

二人の様を嘲けるやうな眼つきでじろりじろりとみてゐた松谷は、その時、頓狂な調子で口を出して、

「いや、お嬢さん。貴女は何處までいつたつて、到底道徳家にはなり得ない方ですよ。オットオ・ワイニイゲルの説に依ると、女には娼婦型と、母婦型とあるさうです。貴女はその娼婦型の方だ。媚と、デボーシエリイで、一生男性を苦惱させる人だ。はゝゝゝ。」と、噎れたやうな聲で笑ふ。

民子は餘まり露骨に云はれたので、稍頬を染めて、

「まあ、随分な。」と、云つたつきり、少時の間てれてゐたが、光雄はその間を取做す氣で、

「いや、松谷君、そりや君の觀察は間違つてゐるよ。娼婦型と母婦型とはさう截然と區別のつくものぢやないさ。お互にミツキスしてゐるところに性格といふものが現れてくるのさ。」と、云つて、照子の方を向きながら、「君、それぢやこの照子さんは何方に屬するのだ？ それに對する君の觀察を聞かうぢやないか。」と、笑ひながら乗り出していふ。

松谷は黙つて少時の間答へなかつたが、やがてぐうつとウキスキイを一杯呷つて、きよとりした顔で、

「この福井さんのお嬢さんですか。この方は天使さ。天上の子さ。まだ今の處ぢやオットオ・ワイニイゲルの實驗臺のうへに載せることは出來んですよ。はゝゝゝ。」と、腹を抱へて笑ふ。

民子はその顔をみて、

「まあ、松谷さんは随分照子様以最負をなさいますのねえ。よう御座いますわ。私が娼婦型で照子様が天使ぢやあんまりですわ。」と、いふ。

松谷は新しい洋盃を命じて、

「いや、お気に障つたら、お許し下さい。自體僕は自分の天職の上から云つて、どうもまだ現實の世界といふものを、何等の疑惑なしに承認することが出来るのですよ。ですから僕の藝術の本尊はヱキナスよりも處女テレジャです。じいつとかう胸に手を置いて考へてみると、僕の眼の前には希臘の神よりもつともつと、本質的な、云ひかへれば空想的な處女の神の姿が髣髴として來るのです。それを見詰めてみると、僕はその神に對して、溢れるやうな濇い愛を感じてくるんです。」と、云つて、兩手で胸を抱きながら、遠い空を仰望するやうに少し顔をあげて、男にしては睫毛のながすぎる綺麗な眼を据ゑる。

その時、照子は又顔をあげて、ちらりと松谷の方をみたが、彼女には、その顔が非常に美しく見えたのであつた。今迄は何處か薄氣味の悪いやうな、氣塞りなやうな氣のしてゐた松谷が

その晩は何にかしら自分の眞實の心持ちを理解して呉れるやうに思はれて、照子は彼に對していゝ感情を持たずにはゐられないのであつた。

松谷はそのまゝ語を續けて、

「併し僕は、さうは云ひながら、この通り酒も飲みます。自墮落な生活もしてゐます。僕の生活を見た人は僕を一種のデカダンだと云ひます。併し僕は敢て云ひます。精神生活のうへから云つたら、僕はまだこの柴山さんほどにも墮落してはゐないのです。僕の荒んだ生活は唯、僕の生存意識を擴大させる爲めと、それから創作慾に答を加へる爲めばかりなのです。ですから僕はいくら處女テレジャの前で醜態を演じても、自分は、少しも恥ぢないのです。僕は酒を飲めば飲むほど神の意識が鮮明になつて來る。藝術的空想が豊富になつて來る。感興が横溢してくる。その爲めに現實の醜さや、汚らはしさを見ないのは、僕自身が神に愛されてゐるからだと確信してゐるのです。僕は處女を尊敬します。神の子を愛します。濇い五月の太陽が、咲き誇つた花の柔かい唇を愛するやうに、僕は總ての美しい處女を愛し度いのです。その廣い、美



しい、汚れない感情が、僕を幸福にして呉れるのです。」と、彼はもう感激しきつてゐるやうな、緊張した調子で、誰れに云ひかけるともなく、獨りで云ひ續けた。

民子はその言葉を半分は浮の空で聞いてゐるやうであつたが、やがてくすくす笑ひ出して、何か光雄の耳へ叫び出した。光雄も可笑しさうな顔で、それにこそこそ相槌を打つてゐた。

松谷はそれだけのことを云つてしまふと、そのまゝ急に深い沈黙に落ちて、今度はちびちび洋盃ばかり嘗めながら、可笑しいほど氣難かしい顔になつていつた。

## 十八

十一時が十分程過ぎると、可成り酔つた光雄もあんまり遅くなつては可けないと思つたか、自分で勘定を拂つて名残り惜しさうに立ち支度をした。彼はこの雪であるから、松谷も一緒に自動車に乗せて家まで送つていつてやらうと云つたが、併し、松谷はそれを鼻の先で扱つて、「まあ、そんなことを云はずに、お嬢さん方を早くお宅へ送り届けて上げたらいいでせう。そ

れが貴方には一番似合つたお役目ですよ。」と、云つて、笑つてゐる。

光雄は一寸厭な顔をしたが、それでも素直に、

「それぢや君、僕はお先へ失敬する。弘田に逢つたら、よろしく云つて呉れ玉へ。」と、云つてそれなり照子と、民子を送つてカフエーを出た。

往來へ出てみると、雪は先刻よりも一層しんと降りまさつて、向側の軒燈も見えない位な大粒なのが横なぐりに風に追はれてゆく。道の面にも乾いたところにはもう眞白に積もつて寒氣は針のやうに鋭く肩先へ迫つて來た。

光雄は二人を自動車へ乗せると、自分も乗つて、先づ第一に民子の家へ送つてゆくやうに運轉手に命じた。光雄は酔つてゐるので口も軽く、隣りにびつたりと坐つた民子の方をみて、「ねえ、民子さん。あの松谷といふ男も随分可笑しな奴ですねえ。彼奴はあんなことを云つてゐながら、どうせ今夜あたりは何處かあの近邊の待合へでもしけ込むに極つてゐるんですよ。口でばかり綺麗なことを云つてゐて、あんな美術家なんていふものゝ品行は實に信用が出来ないで

すからねえ。」と、いくらか含む處があるやうに云ふ。

民子は一も二もなくそれに賛成して、

「ほんとにねえ、私もうちやんとあの方のお心は見抜いてゐるんですわ。あんなことを仰有る方に限つてよくないことばかりなさるもんで御座いますわねえ。今仰有つたことを黙つて聞いてはゐましたけれど、私、ほんたうのことを云ふと憎らしくなつてしまひましたわ。」と、云ふ。彼女も少し酔つてゐるやうに、まだ頬を紅くしてゐた。

光雄はそれに力を得たやうに、

「僕だつて彼奴が今云つたことに對しては、相當に反感も持つてゐるし、又馬鹿々々しくも思つてゐるんです。彼奴は僕等に對してあんな大きな顔はしてゐますけど、あれで僕の友達がパトロンになつて、彼奴の生活を保證してやつてゐるんですもの。それなのに、あんなに酒ばかり飲んでゐて、何うするんでせう。いくら天才だと歌はれてゐる人間だつて、あんなことをしてゐりや末に見込みがなくなつてしまひますよ。」と、尤もらしい、大人びた云ひ方をする。

民子は大きく合點いて、

「ほんとにさうで御座いますわ。あんなにお酒をお飲みになる際に、一枚でも多く畫をお描きになりやいゝんですわ。それに、お酒をお飲みになるお金があるんなら、なにも、人様のお世話になんかおなりにならなかりやいゝのに、ほんとに意氣地のない。一體藝術家なんていふものは皆あんなものなんですわねえ。」と、蔑むやうに云ふ。

光雄は前燈の閃光にちらちら光る雪の美しさに見入りながら、

「ほんとに仕様がなない男だ。一枚でも畫が賣れたら、その金で繪具のひとつも買へばいゝんだ。今度弘田に逢つたら、大いに云つてやらなかりやならない。」と、獨り語のやうに云ふ。

そんな話をしてゐるうちに、もう自動車は三宅坂から左へ折れて、平河町の通りにある民子の家の前へやつて来て、そこですつと止つた。

運轉手が扉を開けると、民子はさもく別れ度くないやうに、起ち上つて、

「どうもほんとに有難う御座いました。態々送つてまで頂いて、ほんとに申譯も御座いません

わねえ。」と、云つて、車を下りて、雪の降りしきる中へ立ちながら「ねえ、光雄様。それでは先程帝劇でお約束致しましたものね、明日早速お届け致しますわ。どうかよろしくね。」と、何やら意味ありげに云つて、今度は照子の方へ、照子様、「それではお先に御免遊ばせよ。どうかお母様によろしく。いづれ明日電話でお話し致しますわ。」と、別れを告げる。

照子は何んにも云はずに只頭だけ下げた。運轉手は又扉を閉めて、そのまゝ今度はさつきよりも一層早い速度でついと駛り出した。たつた二人きりになると、光雄は急にゆっくり寛いで坐つて、薄氣味悪いほどにこにこしながら、

「ねえ、照子さん、随分降つて來ましたねえ。貴女もつとこれをお懸けなさいよ。風邪でもひくと大變ですから。」と、云つて、厚い毛織物の膝懸けを彼女の方へ懸けてやる。

それでも照子は身動きもしずに黙つてゐるので、光雄は機嫌をとるやうに、その顔を覗き込みながら、

「ねえ、照子さん。貴女怒つてゐるんですか。そんなに黙つてばかりゐないで、何んとか云つて下さいな。それでないと僕寂しくなつてしまふんですもの。」と、いふ。

照子はその時、何んと思つたか、やつと重々しく口をきつて、

「光雄様、貴方のお宅はついそこんなんですから、お宅までお送り致しますわ。さうしてお宅で別な自動車を雇つて頂いて、私、それで歸りますわ。」と、ぶつきらぼうな調子でいふ。

光雄は態と彼女の方へ肩を寄せて、

「照子さん。何故そんなことを云ふんです。僕貴女を柏木まで送らない位なら、こんなに遅くまで引止めやしませんよ。僕は自分でお送りするといふ責任をもつてカツフエなんぞへ廻つたんぢやありませんか。」と、恨みがましく云ふ。

照子はそれでも顔を伏せて、

「でも、あんな遠い處まで送つて頂いちや私、……」

「遠くたつて何んだつて、僕の邸の自動車ですもの、構やあしなないぢやありませんか。そんな

ことを云はずに、今夜はもうさう長く逢つてゐられないんですから、何か面白い話をしませうよ。ねえ、照子さん。」と、云つて、彼は車窓から外を一寸覗いてみながら、「ねえ、照子さん、二人で乗つてゐるところを他人に見られると可けないから、この電燈を消してしまひませうよ。さうすりや外からは見えないから。」と、云つて、坐席の下についてゐるスイッチを捻つて車内の電燈を消してしまふ。

照子は慌て、

「あら、光雄様、そんなことを遊ばしちや私、厭で御座いますわ。光雄様。」と、云つたがもうその時には、光雄の腕は素早く彼女の肩へ捲きつけられ、酒臭い彼の顔は照子の頬に觸れんばかりに近寄せられてゐた。

照子は身を悶えて、

「あら、光雄様、そんなことを遊ばしちや、私、厭ですつて云ふのに。」と、云ひながらどうかして體を自由にしようとしたが、さうなると光雄は力一杯に彼女の柔かい胸を自分の胸の中へ

抱き緊めて、聲さへ立てさせまいとする。

照子は必死になつて争つたが、併し到底敵はないので、急に泣き出して、

「光雄様、覺えて被居いませよ。」と、息塞るやうな聲できれぎれに云ふ。

光雄は興奮しきつてゐるやうに、

「ねえ、照子さん。貴女も随分ぢやありませんか。此間上げた僕の手紙は讀んで下すつたんですか。讀んで下すつたんなら、何故、何故、返事を下さらないんです。僕もう毎日々々大學へも行かずに、今にも來るか、今にも來るかと思つて、氣狂ひになりさうな心持ちで待つてゐるんぢやありませんか。ねえ照子さん。何んとか云つて下さい。今夜のうちに、どうか僕に、あの返事を、貴女の口から、貴女の口から聞かして下さい。」と、云つて、彼はどうかして照子の頬へ唇を押當てやうとする。

照子はやつと左の手だけ自由になつたので、その手で光雄の顎を容赦もなく押へながら、

「私、私、御返事なんか出来ませんわ。どうか貴方、この手をお離しになつて下さいました。私、

苦しくつて。」と、息も絶えだえにいふ。

光雄はさう云はれ、ば云はれるほど熱狂して、何うかして接吻をしようと思ひながら、

「照子さん。返事をしないなんて、そんな、そんな冷淡なことは云はないで下さい。貴女は何んと思つてゐるか知りませんが、僕は、僕はもう死ぬ程貴女のことを思つてゐるんです。あの手紙にも書いて上げた通り、僕は貴女と結婚することが出来なかつたら、それこそ、それこそ僕は自殺してしまひますよ。それでも、貴女は僕を憐れんでは呉れないといふんですか。」と、慄へ聲でいふ。

照子はもう何んともそれには答へなかつた。

光雄は少し力を緩めて、

「照子さん、さ、どうか今夜自動車に乗つてゐる間に、僕を救ふと思つて返事をして下さい。僕はもう今夜は覺悟をきめてゐるんです。……」と、云ひかけたかと思ふと、その途端に彼等の乗つてゐる自動車はどうしたのか。俄然二度ほど強く跳ね上るやうにバウンドして、それなり

恐ろしい音を立て、前躍りにがたツと停つてしまつた。二人はその反動で、譯もなくころりと坐席から轉り落ちてしまつた。

光雄はやつと起き上つて、度を失つたやうな聲で、

「おい、松島、どうしたツ」と、運転手の名を呼んだが、運転手は何んとも返事をしない。

とみると、自動車は何處か穴のやうなところへ車體の前半を突入れでもしたと見え、前燈も何も消えて、四邊は唯一色の闇に包まれてゐる。床のうへへ俯向けに倒れた照子も何うしたのか、身動きもしなかつた。車窓の硝子も壊れたと見え、そこから冷たい雪風がさつと吹き込んでくるのを、光雄は頬に感じた。「おいツ、松島ツ」と、彼はおろおろ聲でもう一度運転手を呼んだが、それでも、何の返事も聞えなかつた。

十九

光雄はいくら運転手の名を呼んでも、何んとも返事をしないので、何んだか自分も生命の危険

に脅かされてゐるやうにぞうツと身柱もとから慄へ上りながら、今度は座席の床へ倒れてゐる照子の體へ手をかけて、

「照子さん、照子さん。何うしました。怪我でもしたんですか？」と、恐る恐る聲をかけてみた。

と、照子はその聲でやつと我に返つたか、何にも云はずにむくむく起き上つてくる。

光雄は、眞暗な中なので、又その體を横抱きに抱き緊めて、そつと座席へ腰をかけさせながら、

「照子さん、ほんとに大丈夫ですか。何處も怪我はしませんか？」と、いたはるやうに云ふ。

照子はそれでも返事をしすじいつとしてみたが、少時すると、低い聲で、かすかに、

「私、肩が痛い。」と、呟く。

光雄は心配さうな聲になつて、

「肩が痛い？ それぢやきつと何處かへ打突けたんでせう。何にしろ、かう眞闇ぢや何うにも

ならない。松島もきつと何うかしてしまつたに違ひありませんから、兎に角僕様子をみてきませう。一寸待つて下さい。」と、云つて、彼はそのまま、そゝくさ立つて、扉を開けてみた。と、扉にも何か故障が出来てゐるとみえて、中々開かなかつたが、光雄はやつとのこと、蹴放すやうに押し開けて、足許を探りさぐり外へ出てみた。

と、みると、そこはもう西大久保を外れた畑道で、行手には見覚えのある變壓所の大煙突が降りしきる雪にかきくねながらかすかに隠見してゐる。四邊には半分建ちかけた新開町の貸家普請が二三軒みえてゐるつきりで、眞直な道には人ツ子一人通つてゐない。よくみると自動車はとある小橋を渡り損ねたとみえ、路傍の一間ばかりな草土手から斜に滑り落ちて、前輪を麥畑の中へ突入させたまゝ前踏りに停車してゐるのであつた。そこは丁度曲角になつてゐるうへに、道幅が狭くなつてゐるので、雪に紛れて前燈の光が届かなかつたゝめに、こんな失敗を演じてしまつたものらしかつた。

光雄は何よりも運轉手の松島のこと心配になるので、運轉臺へ取継つて、やつとその扉

を開け、半身中へ突き入れながら、

「おい、松島、どうした。松島。」と、大きな聲で呼んでみた。そして四邊の雲明りに透かしてみると、松島は把手を握つたまま、體ごと座席から摺り落ちて、肩を斜ツかいにしながら人心地もないやうにぐつたり倒れてゐた。

光雄はその肩へ手をかけて、引起こすやうにしながら、もう一度、

「松島、松島、おい、しつかりして呉れんか。」と、おろおろ聲で呼んでみた。

と、松島は體へ觸られたので、やつと人事不省から覺めたやうに、肩を動かして、

「あゝツ」と、云ひながら、これもむくむく起き上つて來た。

光雄はほツとして、

「お、松島、やつと正氣づいたか。しつかりして呉れなくちや可かんぜ。おい、松島。僕だよ。」と、云つて、彼も松島の脇の下へ手を突込んで、起き上らうとする彼に力をかけてやりながら、「おい、お前、何處か怪我でもしたのか。ほんとにしつかりして呉れなくちや駄目ぢやな

いか。」と、息を弾ませながらいふ。

松島はまるで夢でもみてゐるやうに眼を摩りながらぼんやりしてゐたが、やがて何と思つたか、ひよいと帽子をとつて、ほんとに正氣づいたやうに、

「あ、若様ですか。どうも飛んでもないことをしてしまひまして。……」と、慌てゝ云つて、そのまゝ向側の扉を無理にあけて外へ下りて來る。彼はその時、初めて自分の過失から貴重な車體を破壊したことに氣がついたとみえて、氣もそぞろになつたやうにうわうわしてゐた。

松島は雲明りに透かして、カーブレータのところを仔細に點検してゐたが、下の方は暗くてまるで分らないので、やがて衣囊からマッチを取出して、シユツと摺つてはそのかすかな瞬間の火光を頼りに前輪の間からうへを覗いてみた。その時、光雄は彼の鼻穴から眞紅な血が流れ出てゐるのを發見して、吃驚したやうに、

「お、松島、お前鼻をどうかしてゐるぢやないか。大變に鼻血が出てゐるぞ。」と、いふ。

松島はそんなことは氣にもならないやうに、かつと唾を吐いて、又次のマッチを摺りなが

ら。

「いや、私今把手で鼻を打衝けましたんで、それでうゝんと気が遠くなつてしまひましたんですよ。併し大して痛みもしませんから、どうか御心配なさらなさい。と、云つて、やつと安心したやうに、「若様。いゝ鹽梅にタイヤが片方駄目になつただけで、別に大した損害もないやうで御座いますよ。まあこれで私もやつと安心しました。この車でも壊したら、それこそ私は腹を切らなけりやなりませんからなあ。」と、さも嬉れしさうにいふ。

光雄もそれを聞くと、張りつめてゐた気がゆるむほどほつとした。車は柔い畑の土の中へめりこんでゐるだけで、別にこれと云つて損傷も出来てゐなくて、唯人手をかりて道へ引上げさへすればいいのであつた。前燈や硝子のこはれたのもすぐに修繕が出来る程度のものであつた。

光雄は何にしるもう時間は遅いし、さうやつてゐる譯にもいかないので、松島をつかまへて、どうにかして呉れとせがんだ。松島は鼻血を拭きふき少時の間考へてゐたが、やがて、

「若様、それでは兎に角私大急ぎで淀橋までいつて、代りの自動車を呼んで参りませう。若様はそれで福井様のお嬢様をお送りになつて、すつとどうかお邸の方へお歸りになつて頂き度うございます。さうすれば私、何處かそこいらから人足を雇つて來まして、今夜中に車の始末をしまして、お邸へ歸りますから。」と、いふ。

光雄はこの雪の夜更に邸の自動車で散々乗り廻はした揚句、こんなことになつてしまつたので、これからたつた一人で邸へ歸つていくのは父伯爵や邸のものゝ手前ひどく気がひけてならなかつたが、併しさうかと云つて、うかうかしてゐるともう一時になつてしまふので、彼は澁澁それを承知した。

「おい、松島、それぢや氣の毒だが、成る可く大急ぎでいつて來て呉れよ。僕、照子さんと二人で車の中で待つてゐるから。」と、心細さうにいふ。

松島は合點いて、

「はい、畏りました。淀橋には一軒知つた自動車屋がありますから、三十分とはお待たせしま



せん。それぢや行つて参ります。」と、云つて、彼はまだ足が痛むかして、跛をひきひき眞暗な町の彼方へ急ぎ足に姿を消してしまつた。

光雄は何んだか一時に興ざめて、酒氣もさめてしまつたやうな氣はしたが、それでも態と元氣を出して、又車の中へ入りながら、

「照子さん、何うしました？ もうすつかり氣持ちは癒りましたか？」と、いふ。

酒間なかなので、よくは分らなかつたが、照子はその時は座席へ俯向けに倒れて、何處か痛みでもするのか、肩で息をしてゐるやうであつた。

光雄はじいつと眼を据ゑてみてゐたが、漸次眼が闇に馴れてくると、その雲明りで照子の姿が朦朧と瞳に映つてくる。膝懸けのうへへ上半身を横にして力なげに倒れてゐる照子の姿は不思議な衝動を光雄の心に湧き起させた。

光雄はそつとその肩へ手をかけて、

「照子さん、ほんとにしつかりして下さいよ。まだ肩が痛むんですか。」と、云ひながら、その

まゝ彼は照子の傍へ腰を下ろして、そつとその顔を覗き込むやうにしたが、照子はそれでも何とも返事をしない。

光雄はさうなると妙に焦だゝしいやうな、胸のときめくやうな思ひが、皮膚を刺すやうに感じられていきなり照子の體を抱きしめながら、

「照子さん、照子さん。」と、喘いで、又その冷たい頬へ接吻をしようとした。

照子はそれを見ると、何うしたのか、急にむつくり起き上つて、

「光雄様。どうか後生ですから、そんなことなさらしないで下さいました。私、今前の座席で肩を打つたとみえまして此方の手がしびれて痛くつて仕様がないで御座いますもの。私、體になんかお觸りになつちや厭ですわ。」と、きれぎれに切なさうにいふ。

光雄はもう我を押へることが出来ないやうに、

「照子さん。僕何んにもしませんから、どうか、どうか少時の間かうさせて置いて下さい。僕明日になつたら、どんな事をしてゞも謝ります。僕は今夜は實際狂的になつてゐるんですも

の。」と、息詰るやうな声でいつて、「こんな處で自動車が止つてしまつたのも、何かの暗示かも知れません。照子さん。ほんとに一生に一度でいゝから、僕に、僕に……」と、いひながら彼は先刻よりも猶ほ激しい興奮状態に陥つて、照子の胸をどうかして、自分の胸へ抱きしめようとした。

照子はさうなると半ば恐怖に襲はれて、力一杯に光雄を突き退けながら、

「光雄様、厭です。私厭です。貴方は貴方はほんとに卑怯な方ですのねえ。こんなところで私をお窘めになるなんて、貴方は男のやうでもない。……」と云つて、彼女は突如に聲を呑んで泣き出してしまつた。

## 二十

光雄はそれでも猶ほ執念く照子に絡りついて、

「照子さん。どうかそんな冷淡なことは云はないで下さいな。僕、この間の手紙にも書いてあ

げたとほり、ほんとにもう生命も要らないほど貴女のことを思つてゐるんです。僕はどうしてもこの心持ちが貴女に分らないかと思つて、それが焦悶しくつて堪らないんです。照子さん。ほんとに今夜こそ、今夜こそばつきり返事をして下さいな。」と、思ひ迫つていふ。

照子は人の往來も途絶えたこの雪の中ではあるし、しかも運轉不能に陥つた自動車の中なのでもう何うすることも出来なかつた。光雄がこれほどまでに熱狂してゐては、もう到底腕力では敵はないので、彼女は唯力なく鞞り上げてしくしく泣くばかりであつた。

光雄にはさうした素直な、弱々しい照子の様子が堪らなく蠱惑的であつた。彼はもう前後も打忘れやうに、熱して來て、

「ねえ、照子さん。もし貴女が何とも返事をして下さらなければ、僕ほんとに自殺をしてしまひすよ。僕は貴女を自分のものにする事が出来なければ、もうこの世の中に生きてゐる甲斐はないんです。僕のこの心持ちを貴女に理解して貰ふことが出来なければ、僕は全くのところ死んでも死に切れないんです。照子さん、照子さん。ほんとにどうかして下さい。そんなに

「焦らさないで何とか云つて下さい。」と、今度は啜り泣くやうな調子になりながら云ふ。

照子は悲しげに歎き上げながら、やつと口を切つて、

「光雄様、貴方、それぢやあんまり御無理ですわ。それでは、それでは貴方、私を強迫なさるやうなもんぢや御座いませんか。それよりもどうか後生ですから、この手を、この手をお離しなすつて下さいました。」と、苦しうにいふ。

光雄も柔かい温みの通つてくる腕を少しゆるめながら、

「いや、もうかうなつちや無理でも何んでも、僕はもうそんなことは考へてゐられないんです。僕はどんな無理でももう押徹してしまはなけりやゐられないんです。ねえ、照子さん、貴女は、僕がこれほどまでに思つてゐるのに、貴女は何んとも思つちや呉れないんですか。」

照子は稍體を自由にして、

「私、私、そりや有難いと思つて居りますわ。ですけれど、ですけれど、私貴方にそんなに思つて頂いても自分では、自分では幸福だとは思ひませんわ。」と、いふ。それだけいふのももう

一生懸命であつた。

光雄はその言葉を聞き答へて、

「何んですつて？ 僕に思はれても、貴女は幸福でないつて？」と、いふ。

照子はその隙に身を退いて、扉の方へ寄りながら、

「私、私、そりや昔は貴方が好きだつたことも御座いますわ。でも私、今夜はもう貴方が嫌ひになつてしまつたんです。」と、はつきり云ふ。

光雄はもだもだして、

「照子さん、貴女は、貴女は何ういふ意味でそんなことを云ふんです？ 貴女は僕がこんなに暴力に訴へて、貴女に返事をさせようとしたからなんですか、それとも又別に何か理由があるんですか？」

照子は泣きながら、

「あの、それもありますけれど、私、貴方の今夜のなさり方があんまりだと思つて、それで貴

方のお心を疑つてゐるんです。」

「僕の心を疑ふ？」

照子はやつと顔から手帛を離しながら、

「光雄様。貴方、そんなにお白ばつくれにならなかつていゝぢや御座いませんの。貴方は私のことを思つて被居るつて被仰つてゐながら、ほんたうはあの民子様に何にして被居るんでせう。私、ちゃんと知つて居りますわ。貴方と民子様との間に何ういふ關係が出来てゐるかつていふことは、いくらお隠しになつても、私には分つて居りますわ。私、そんな、そんな穢れた方は嫌ひなんですの。」と、今迄とまるで違つた鋭い語調でいふ。

光雄はさう云はれると、さすがにたちたぢとして、俄かに取つてつけたやうに笑ひ出しながら、

「はゝゝゝゝゝ。照子さん、貴女も随分神経質ですねえ。一體何を感じ練つてそんなことを云ふんです？ ほんとに可笑しな人だ。僕は今夜帝劇で偶然民子さんに逢つたから、一緒に坐つて

ゐたゞけの話ちやありませんか。」

照子は激しく頭を振りながら、

「いゝえ、いゝえ、何んと辯解遊ばしても駄目ですわ。私、もう此間からの民子様の御様子で何もかも分つてしまひましたんです。貴方はちゃんと前から打合せをしてお置きになつて、帝劇で民子様にお逢ひになつたに相違ありませんわ。そんなことをなすつて置きながら、私をこんな酷いめにお逢はせになるなんて、貴方も随分酷い方ですわねえ。私、もうかうなれば、云ひ度いことだけは申しますわ。貴方はほんとに酷い方です。貴方は私を弄ばうとして被居るんです。私、いくら馬鹿でも、そんな、そんな、貴方のお慰みものになんかなりませんわ。」

光雄はひどく迫き込んで、

「照子さん、まあ、待つて下さい。貴女は誤解をしてゐるんです。まあ、待つて下さい。」と云つて、やつと彼は照子の手を放しながら、「照子さん。貴女は興奮してゐるから、何んでも彼んでも誤解してゐるんです。僕がなんでそんな思ひまでして、あの民子さんに逢ふ必要があるで

せう。しかも民子さんは今夜は加藤さんと一緒に来てゐるんぢやありませんか。」

「いゝえ、いゝえ、民子様はもう加藤さんのことなんか何んとも思つちや被居らないんです。貴方の爲めなら、きつと今度の御結婚も破談にしておしまひなされるに違ひありませんわ。ですから、貴方はもうあの民子様のものなんです。私、これだけ申上げればそれでいいんですからこれで失禮いたしますわ。」と、云つて、彼女はその隙に突如扉をあけて、そのまま雪の中へひらりと飛び下りてしまつた。

光雄は怪乎として、

「あツ、照子さん。笑談をしちや可けませんよ。今松島が自動車を雇つて來ますから、一寸待つて下さい。照子さん。」と、云つて、續いて自動車を下りようとしたが、その時、彼の外套の裾が何處かへ引懸りでもしたとみえて、弾みをくつて、彼は耐力もなくするりと踏段のところへ滑つてしまふ。

照子はその間に、光雄の方を振顧つて、

「光雄さん。私もう貴方にはお眼にかゝりませんわ。左様なら。」と、云ひ捨て、彼女は足に任せて雪の中を一目散に西の方へ向つて走つていつてしまつた。

光雄は起き上つて、ぐいと外套の裾を引張つたが、びりびり布地が裂けるので、彼は自棄になつたやうに力一杯に振りもぎつて、すぐさま照子の後を追つていつた。

光雄は二丁ほど後をつけていつたが、もう夜の闇と降る雪にかきくれて、照子は何處へいつてしまつたものか足音さへ聞えない。彼は大きな聲を振り絞つて、

「照子さん、照子さん。」と、呼んだが、返事もなかつた。

光雄は地に俯して、そつと足跡を探したが、もう雪が彼此二寸も積つてゐるので、道の凹凸がみえるだけで、それらしいものも見出すことが出来なかつた。

光雄は走つたので、酒の酔ひが出て來て、せいせい云ひながら、又、

「照子さん。照子さん。」と、呼びつゞけながら降る雪の中を足許も危うげに先へ先へと走つて行つた。

丁度その時、照子は自動車の落ちたところから、僅か一丁ばかり離れた、とある路傍の木影からこつそり現はれて来た。彼女が闇に紛れて、そこへ巧みに身を隠し、あとから追つて来る光雄を遣り過ぎたのであつた。彼女は自分の名を呼びながら漸次と向ふへ遠のいてゆく光雄のあとを見送りながら、今度はしすましたりといふやうに、先刻の小川の縁へ出て、その小徑を見覚えのある變壓所の煙突を目當てに、とつと、驅けていつた。そのうちに又畑の畔へ出てそこから左へ曲つて眞直にいくと、すぐ眼の前に思ひがけない省線の電車の線路が現はれて来た。彼女はもう前後の考へもなくその土手を攀ぢ登つて、布を敷いたやうな線路端の雪のうへへぐつたりとくづをれてしまつた。

照子は我を忘れて一心になつて驅けて来たので、もう心臓は破れさうに波打つてゐた。そこまでくると却つて恐怖に似た感じがぞうつと身に迫つて来て、彼女は思はず身慄ひをしたのであつた。

そこからみると、浅い谿のやうになつた一帯の畑地にももう雪が降りつもつて、見渡す限り

ほの白い幻影の世界のやうにしんしんと静まり返つてゐる。雪は粉のやうに細かくなつて、あるとしもない風に追はれながら、まるであやかしのやうに不思議な縞目をゆらめかしながら闇の中に降しきつてゐる。さうしてゐるうちに照子は、着物の肩や袂が眞白になつてゆくので、やがて又勇氣を奮ひ起して、ついと満身に力をこめながら起き上つた。その時になつて、初めて彼女は又肩の痛みを感じ出したのであつた。

照子はそのまゝ電車の線路に沿うて、そろそろ歩き出したが、とみると、もうすぐ鼻の先に東中野の停車場がみえてゐる。もう最終の電車が来るのにも間がないとみえて、停車場の信號燈は心細げに明滅してゐたが、それをみると照子は涙の出るほど嬉れしくなつて、足を早めてそつちへ向つて歩いていつた。

停車場の少し手前のところで一度土手を下りて、下の路から停車場の方へ上つていつたが、その時、ふつとみると、がらんとした待合室には、たつた一人學生のやうな風をした若い男が外套を引被ぶつて、ほの暗い燈火の下で、頻りに何か書を読んでゐた。照子は何となく人懐か

しくて耐らないので、そつともう一度そつちを覗き込んだが、よくみるとそれは思ひも懸けな  
い啓次郎であつた。

照子はひどく吃驚して、停車場の外から、

「まあ、啓次郎さん。」と、叫んだが、その聲で啓次郎ももぞりと顔をあげて、此方をじい  
て、やつと照子と知つたらしく、

「お、照子さん。何うなすつたんですか。」と、云ひながら此方へ立つてくる。彼は片手に二本  
の傘を提げてゐた。

照子はその咄嗟返事に詰つたが、もう唯嬉れしくて、

「啓次郎さん、何うしたかぢやないわ。私、今帝劇から歸りに光雄様に送つてきて頂いたら、  
つひそこで自動車が畑の中へ落ちちやつて、そりや大變なの。だから私、歩いて來たのよ。」  
と、ひと息に云ふ。

啓次郎はそれを聞くと、さすがに眼を丸くして、

「へえ、自動車が畑へ落ちたんですか。それで誰方もお怪我は？」と、訊く。

照子は停車場の軒の下へ入つて、雪を拂ひ落としながら、

「あの、いゝ鹽梅に誰れも怪我はしなかつたんですけれど、あの、それでも運轉手が鼻を打つ  
て鼻血が出て大變だつたの。」と、云つて、啓次郎の顔をみながら、「それよりも貴方どうしてこ  
んな處へ來てゐるの？」

啓次郎は眼ばかりばちくりさせながら、

「いや、僕ですか。僕はその、貴女のお歸りがあんまり遅いんで、伯母さんが大變に御心配な  
さるもんですから、先刻から此處へお迎ひに來てゐたんです。」と、いふ。

照子はこの寒いのにがらんとした吹き曝らしの停車場へ迎ひに來てゐて呉れた啓次郎の親切  
な心が、その晩はひどく嬉れしくて、

「あら、まあ、そりやお氣の毒様でしたわねえ。私も母様がさぞ心配して被居るだらうと思つ  
たんですけれど、どうすることも出來ないんで、ほんとに困つてしまひましたわ。それぢや啓

次郎さん、すぐに家へ歸らうぢやありませんか。」と、いふ。

啓次郎は合點いて、傘をひろげて照子に渡しながら自分も停車場を出てくる。

照子はもうすつかり心強くなつて、

「啓次郎さん、貴方よつほど待つて？」と、訊いたが、啓次郎は外套の襟を引立てながら、

「え、こゝへ來たのが十時半でしたから、もう二時間位になるでせう。」と、格別待ち草臥れた風もなくいふ。

照子はその言葉にさへ涙ぐまれるほど感情が鋭くなつてゐるので、もう何んとも云へなくなつて、唯啓次郎の傍へ寄り添ひながら暗い道を邸の方へ歩いていった。

## 二十一

そのことがあつてからは、もう照子の心持ちはすつかり光雄から離れていつてしまつた。彼女は肩の痛みがとれない間は、光雄の腕の力を今も猶ほ絶えずその肩にうけてゐるやうな氣持

ちに襲はれることもあつたが、それが癒ると、彼女はいつとはなしにもうその夜の厭な感じから開放されてゆくのであつた。初めて異性の胸に強くつよく抱き締められた感じは、彼女にとつて呪ふ可きものであつた。彼女は心の底からそれを厭だとも思ひ、じつと思ひかへしてみるとしまひには悲しく情なくなることさへあるのであつた。

光雄からも民子からもその後は何の音沙汰もなかつたが、照子は却つてそれをいゝことにしてゐた。電話ひとつかけられても、彼女は何と云つていゝか分らないので、何も便りのないのが寧ろ嬉しかつた。

照子は民子にも逢ひ度くないので、降誕祭になつても、態々假病を云ひ立てにして、聖心女學院へはいかなかつた。彼女はそんなことから却つて自分では心持ちがいらいらして來て、妙にヒステリックにばかりなつてゆくのであつた。彼女の幻の塔に住む人の顔はもう光雄ではなくなつて又美しい天使が來ては、その圓蓋のまはりをはらひらと舞つて歩くばかりであつた。

或日のこと、照子はいつものやうに自分の居間へ引籠つて、頻りに佛蘭西刺繡をやつてゐた



が、そこへ突然、母なるみな子未亡人がこつそり入つて来て、

「おや、照子。又今日も精が出ますね。」と、につこりしながら云つて、彼女の机の前へきて坐りながら、「ねえ、照子、今珍らしく山田さんがお見えになつてねえ。お前にも是非逢ひ度ひつて仰有つただけれど……。」と、いふ。

山田といふのは大審院の首席判事をしてゐる有名な法學博士で、照子の父とは莫逆の友なのであつた。照子も小さい時からよく牛込にあるその邸へ遊びに行つたことがあるので、今でも懐かしい小父様の一人であつた。

照子はそれをきくと、刺繡の手をやめて、

「あら、母様、山田様の小父様が被來いましたんですの。まあ、お珍らしう御座いますわねえ。」と、云つたが、母親はその顔を見て、

「ほんとにさ。もう彼此半年近くもお眼にかゝらないだらうが、相變らずお達者でほんとにお美ましいわねえ。お父様と同年で被居るんだからもう五十八におなりなされるのに、あの方ばかりは何うみたつて五十二三にしきやおみえにならないねえ。」と、云つて、照子の顔色を窺ひう

かゞひ、「ねえ、照子。時に實は、山田さんから改まつてのお話なんだが、そのことをお前と話して、お前の意思を聞かうと思つてねえ……。」と、あやふやな調子で切り出す。

照子は注意深い眼つきで母親の顔をまじまじみてゐたが、やがて心持ち顔を紅くしながら、

「母様、改まつて、何んで御座いますの。」と、いふ。

母親は眞顔で眼を逸しながら、

「何につて、それはお前、實はお前の縁談のことなのさ。實は山田さんも大變にそのことで御心配なすつて下すつて、もうお前も年頃もいゝし、何うしたつて一度は嫁かなけりやならない體だから、是非自分がいゝところへお世話をし度いとかう仰有るのさ。お父様とはあんなに仲のいゝお友達だつたんで、そりやもう親身になつていろく仰有つて下すつてねえ。私はもうほんとにお禮の申しようもない位だつたんだよ。」

照子もしんみりしたその言葉に引入れられて、じいつと眼を落としてしまつたが、やがて、

「母様、その話なら、私、又この次に伺ひますわ。私、まだ結婚なんていふことは考へても居りませんから。」と、呟くやうにいふ。

母親はそれを押へて、

「いゝえさ。ところがお前、山田さんの持つて来て下すつた口といふのは、お前に聞かせたらきつと嬉ぶに極まつてゐますよ。私ももう疾うから考への中に入れてゐただけけれど、まだ時機が来ないと思つて、實は黙つてゐたのさ。」と、云つて、態とにつこりしてみせながら、「ねえ。照子、實は山田さんはお前を、あの、柴山さんの光雄さんにどうかつて仰有るのさ。」といふ。母親の顔には照子が嬉ぶのを期待してゐるやうな色がありありとみえてゐた。

照子はそれを聞くと、反對に顔色も動かさずに、

「まあ、光雄様ですの？」と、云つたが、もうそれなり彼女は口を噤んで、何んとも云はなかつた。

母親はひと膝進み出て、

「光雄さんなら、お前だつてこんな近くに近しく御交際をしてゐるんだから、何も異存はなからうと思ふのさ、それに彼方でも大變にお前を望んで被居るんだつていふから、山田さんもこんないゝ御縁はなからうつて仰有るのさ。それに……」

母親がさう云ひかけてゐるところへ、突然廊下の方から足音がして、小間使のお春が、

「御免遊ばせ。」と、云ひながら入つて来た。

母親はふつと話を途切らせて、

「何か用かい？」と、いつたが、お春はしとやかに手をつかへて、

「あの、唯今お嬢様にお眼にかゝり度いと仰有いまして、あの、先達柴山様の若様と御一緒に

お出で遊ばしましたお方がおいでになつて居りますんで御座いますか……。」と、いふ。

母親は怪訝な顔をして、胸忘れをしたやうに、  
「光雄さんと一緒に被來つた方？」と、云つたが、照子はそれを手で押へて、急に眼の色をいきいきとさせながら、

母様、あの松谷さんのことですよ。母様は一寸しかお逢ひにならないからお忘れになつたかも知れませんが、そら、あの、お父様の御肖像をお描きになつたあの畫家の方ですよ。」と、早口にいふ。

「母親はやつと思ひ出したやうに、

「あゝ、あの方かい。何の御用で被來つたんだらう。今頃變だねえ。今日は光雄さんと御一緒にぢやないのかい。」と、いふ。

お春は頭を下げて、

「はい。今日はお一人で被居います。」と、いふ。

照子は丁度いゝ時に松谷が來てくれたので、山田の話はそのままにして、お春の方を向きながら、

「春、それぢや應接の方へお通しして置いてお呉れな。私今直ぐ行きますから。」と、云つて、そわそわ立上りながら、

「ねえ、母様、きつとお父様の御肖像が出來上つたんでせうから、私、一寸お眼にかゝつて参りますわ。」と、云ひ捨て、足下から鳥が立つやうにばたばた居間を出ていつてしまつた。母親は煙に捲かれたやうな顔をして、ぼんやりそのあとを見送つてゐた。

## 二十二

照子はその儘ずつと應接室の方へ行かうとしたが、何うしたのか、ふと思ひ返して、自分の居間の隣りにある化粧室へいつて、その大きな姿見の前で、顔や髪を直したあとで、如何にも浮々した、嬉れしさうな様子で、小走りにばたばた應接室の方へ入つていつた。

應接室の扉を開けてみると、松谷は何うしたのか、大きな畫枠のやうなものを掲げたまゝ、椅子へも腰をかけずに、茫然窓から外を見ながら突立つてゐた。いつものやうに汚れた、貧しげな背廣を着て、今日は少しも酒精氣がないとみえ、顔色は蒼く沈んで、藝術家らしい神經質がその眼にも鼻のあたりにも刺々しいほどあらはれてゐた。かういふ顔をしてゐる時には蓬髪

の頭も、角ばつた肩つきも、洋服の着工合もしつくりと似合つて、いかにも薄命な畫家といつたやうな、やさしい、繊細な心持ちが身のまはりに溢れてみえるのであつた。照子にはそれが又一種の男らしい美貌として感じられるのであつた。

照子は室内へ入つていくと、何うしたのか急に顔を眞紅にして臆びれた態度になりながら、「まあ、松谷さん。よく被來つて下さいました。さ、どうかまあお懸けになつて下さいませいな。」と、いふ。

松谷はその時初めて、照子の方を振願つて、可笑しいほど丁寧に辭儀をしながら、

「や、お嬢さん。先夜は大變に失禮しました。酔つて居つたもんですから、どうも……。」と、頭を搔いて、畫枠を安樂椅子の脚のところへ立てかけながら、照子と對向ひの椅子へ就く。彼は力めて自由に振舞はふとはしてゐながら、それでも何處かぎごちなかつた。

照子は何んだか松谷の顔が眞面に見られないやうに、眼を逸らして、

「いゝえ、私こそ失禮いたしてしまひましたわ。」と、云つたが、その時、お春が茶や菓子

運んで來たので、少時の間二人はお互に變に黙り込んでしまつた。

お春が持つて來た茶や菓子をすゝめて出ていつてしまふと、松谷は今度は力めて笑ひながら「いや、お嬢さん。あの晩はあれからお歸りが大變だつたさうですなあ。自動車がかはれて、大騒ぎだつたといふぢやありませんか。」と、云つて、ポケットから煙草を取出して、火をつける。

照子も、強ひて、微笑みながら、

「え、ほんとに私、驚いてしまひましたわ。それでも大した怪我がなくて、何よりで御座いましたわ。」と、云つて、やさしく首を傾げながら、「貴方、そのお話は光雄様からお聞き遊ばして？」と、いふ。

松谷はぶかりぶかり煙を吐き出しながら、

「え、柴山さんから聞きました。丁度あの翌日、又僕はあのカツフエで柴山さんに出逢はしてしまつたもんですから。」と、云つてそぐはぬ微笑みを含みながら、「柴山さんも、併し随分悄氣